



ふくしま 森林文化 企画展

目録



福島県文化財センター白河館 まほろん



福島県立博物館



福島県文化センター 歴史資料館



アクアマリンうおのぞき - 子ども漁業博物館 -



ふくしま民の森 フォレストパークあだたら

ふくしま森林文化企画展実行委員会



ふくしま
森林文化
企画展

録

ふくしま森林文化企画展実行委員会

森林文化企画展の開催に寄せて

福島県知事

佐藤 雄平

森林は、木材や山菜、きのこなどの林産物の生産を始め、水資源のかん養や土砂災害の防止、さらには快適な自然環境の創出や二酸化炭素の吸収源としての働きなど、県民に多くの恵みと快適な生活空間をもたらす重要な資源です。私たちは、古来よりこうした森林からの恵みを、感謝の念を持って生活の中に生かすとともに、森林を守り育てながら、今日までの歴史を刻んできました。このような森林を有効に利用する技術や制度、山の神信仰や言い伝えを大切にする生活のあり方などは、郷土に伝わる貴重な財産であり、「ふくしまの森林文化」として、次の世代に確実に引き継いでいかなければならないと考えております。

福島県では、県民が森林を敬い、あらゆる命を尊びながら心豊かに生き、森林の恵みに感謝しつつ森林を守り育て未来に繋いでいくことを誓い、その取組みを進めていくため、平成17年11月に「森林文化のくに・ふくしま県民憲章」を制定いたしました。また、平成18年度からは森林環境税を導入し、水源区域にある森林の整備や森林環境学習の推進、森林ボランティア活動の支援などにより「県民一人一人が参画する新たな森林づくり」などの取組みを進めてまいりました。

森林文化企画展は、こうした取組みの集大成として、「森林文化」をテーマに古代から現代までの森林と人との関わりについて、民俗学、生態学、考古学など多様な分野から探る初めての試みであります。

県民の皆様には、是非この機会に、ご家族、ご友人と各会場を訪れていただき、各館の専門性を生かした魅力あふれる展示を通して、それぞれの「森林文化」との関わりに触れていただきたいと願っております。

結びに、本企画展の開催に当たりご尽力いただきました、関係の皆様、並びに開催期間中、ご支援、ご協力をいただきます皆様心から感謝申し上げ、あいさついたします。

森林文化企画展の開催に寄せて

ふくしま森林文化企画展実行委員会
委員長 鈴木 義 仁
(福島県農林水産部長)

ふくしまの先人たちは、森林と人との密接なかかわりの中で、森林を保全しながら有効に利用する知恵や技術等を培い、それぞれの地域で特色ある森林文化を生み出し、現在まで受け継いできました。

この「ふくしまの森林文化」は、県民の自然観や価値観、ひいては「こころ」の領域にまで大きな影響を及ぼしています。

近年の生活様式の変化に伴い、森林と人との関係が希薄になる中で、この機会に改めて森林の価値を見直し、これからの森林と人との新たな共生について考える場として、県内の文化施設等5館（まほろん、福島県立博物館、福島県文化センター歴史資料館、アクアマリンふくしま、フォレストパークあだたら）が連携し、森林環境税を活用した「ふくしま森林文化企画展」を開催することといたしました。

本企画展では、古代から現代までに築かれた森林文化を時間軸に沿って辿り、5館がそれぞれのテーマで企画展示や体験学習に取組みます。

「まほろん」では「原始・古代の森と人との共生」をテーマに原始古代の人々が生きるために森の資源をどう活用したかを古代の木製品や出土種子展示により探り、「福島県立博物館」では「森に生き山に遊ぶ!」をテーマに過去から現代までに人がどのような森林文化を生成してきたかを古民具や一木づくりの仏像などの民俗資料から探り、「歴史資料館」では「森と人との歴史をたずねる」をテーマに森林の恩恵を現代に伝えた人々の苦労を古文書等から学びます。また、「アクアマリンふくしま」では、「森と海が育む命」をテーマに森から海へ繋がる森林文化を学び、「フォレストパークあだたら」では、「森林との共生を目指して」をテーマに樹木観察会や間伐、炭焼き等を体験することができます。さらに、各館の共通展示として、小学校等で行われている森林環境学習の様子のほか、森林環境税の意義やこれまでの取り組みの成果などを紹介するコーナーも設けております。

皆様には、是非この機会に各館を訪れていただき、ふるさとに伝えられてきた「ふくしまの森林文化」を体感し、これからの森林と人との新たな共生について考えていただければ幸いです。

結びに、森林文化企画展の開催にあたり、ご尽力いただきました関係各位、並びにご指導、ご協力いただきました皆様に心から御礼申し上げます。

目次 contents

ご挨拶

目次

第1章 ふくしまの森林	5
第2章 森林の履歴	23
第3章 森と人の歴史をたずねる	29
第4章 森のくらし	45
第5章 「森と海」～森と海が育む命～	63
第6章 森林を体験する	71

例言 explanatory notes

1. この図録は「ふくしま森林文化企画展」実行委員会の展示図録である。
2. 本企画展は森林環境税を活用している。
3. 参加各館の企画展内容は以下のとおり。
 - 福島県文化財センター白河館まほろん
6月26日～8月29日 「古代の森と人との共生」
 - 福島県立博物館
6月26日～8月22日 「森に生き山に遊ぶ！ ふくしまの森林文化」
 - 福島県文化センター歴史資料館
6月26日～8月29日 「森と人の歴史をたずねる」
 - アクアマリンうおのぞき～子ども漁業博物館～
6月26日～8月22日 「森と海 森と海が育む命」
 - ふくしま県民の森フォレストパークあだたら
6月26日～8月31日 「森林との共生をめざして」
4. 各章の担当は以下のとおり
 - 第1章 福島県立博物館（小澤義春）
 - 第2章 福島県文化財センター白河館まほろん（芳賀英一）
 - 第3章 福島県文化センター歴史資料館
 - 第4章 福島県立博物館（榎陽介）
 - 第5章 ふくしま海洋科学館アクアマリンふくしま
 - 第6章 ふくしま県民の森フォレストパークあだたら

第 1 章

ふくしまの森林



ふくしまの森林の今を見つめよう。

そこに、ふくしまの森林の豊かさが見えてくる。

日本の中のふくしまの森林を見つめよう。

そこに、ふくしまに特有な森林が見えてくる。

ふくしまの森林の未来を見つめよう。

そこに、かけがえのない森林が見えてくる。

「ふくしまの森林」によせて

福島県立博物館

館長 赤坂 憲雄

県立博物館では、分布や生態といった自然的な部分と、生活文化の二つに焦点を当てて展示します。

まずこの第1章「ふくしまの森林」では福島県内の森林がどのように分布し、その現状はどうなのか、という疑問に答えるところからはじめます。いわば、自然科学的な基礎知識です。県内の森林分布図を前にすると私たちが意外なほどみどりに囲まれているということが実感できるでしょう。そのなかにはブナの原生林もあれば、人の手が加わっていた雑木の林もあるでしょうし、見事な杉の人工林もあります。そうした森のいろんな姿をみていただくことにします。

もちろん、堅苦しい学習の場所だけではありません。大きなトチや桐の丸太に、実際の森を想像していただいたり、県内の市町村の「木」を市町村の「形」にして作った木材パズルで遊べます。

遊んで眺めて触れて……そうしているうちに森林の空気がみなさんの体内に知らないうちにしみこんでくる…そんなことを期待しながら想像しています。

どうぞお楽しみください。

ふくしまの森林の成り立ち

ふくしまの森林帯

世界の気候帯は温度条件から大きく、寒帯、亜寒帯、温帯、亜熱帯、熱帯に分けることができる。温帯はさらに寒温帯、冷温帯、暖温帯に細分することができる。日本では寒帯から亜熱帯までの植生が見られる。東南アジアからシベリアにかけてのアジア大陸東岸は、湿潤な気候のため森林が成立し、日本の気候帯で優占する植生は森林になる。亜寒帯から亜熱帯までの森林帯が成立している。緯度の違いによる気候帯に対応した植生分布は「水平分布」と呼ばれるのに対し、標高が高くなるにつれて寒冷気候になることでもたらされる植生分布は「垂直分布」と呼ばれる。

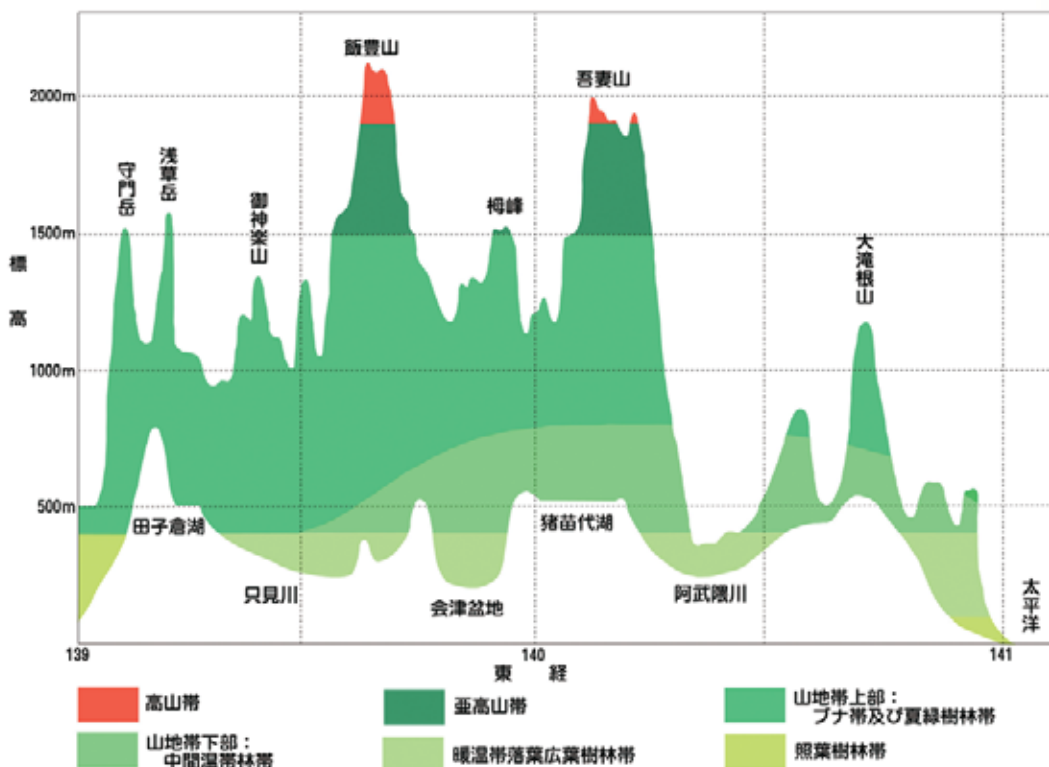
日本では南から北に移動するにつれ、水平分布の森林帯は、照葉樹林帯、落葉広葉樹林帯（夏緑樹林帯）、針葉樹林帯と移行する。また低地から高

地に移動する垂直分布も同様の移行を示す。森林帯は人為的影響がないと仮定したときの自然林（天然林）の分布を示したもので、現実には様々な人為的影響により二次林や人工林が分布している。

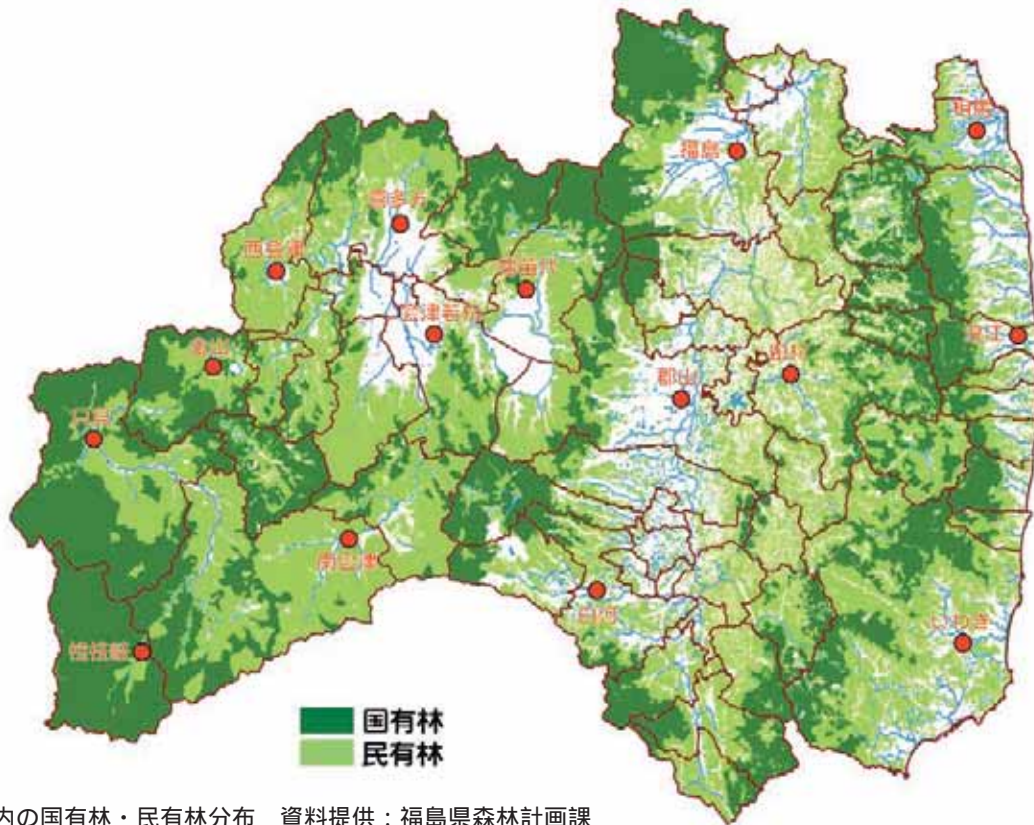
垂直的森林分布を描くと、ほぼ標高1,500m以上はアオモリトドマツ（オオシラビソ）が優占する亜高山帯、標高400mを分布下限（奥羽山脈や阿武隈高地では標高700～800mが下限）とし標高1,500mまでがブナの優占する山地帯上部、標高400～500mから標高700～800mにかけてコナラの優占する山地帯下部、標高400～500m以下は低地帯のシイ・カシ林となる。ただし、実際の森林相は地質的・地形的要素が反映されたものとなる。

ふくしまの森林状況

平成19年3月31日現在の林野庁統計によると、日本の森林面積は約2,510万 ha で国土面積の約



福島県の垂直的森林分布 櫻村（1984）を基に作成



福島県内の国有林・民有林分布 資料提供：福島県森林計画課



アオモリトドマツ林 南会津町田代山



ブナが混交するミズナラ林 北塩原村雄子沢

67%（森林率）を占めている。これは同じ中緯度温帯に位置する島国イギリスの約12%、森林国のイメージが強いカナダの約34%と比べても非常に高い。また森林面積の約3割、国土面積の約2割に当たる約759万 ha が国有林野である。人工林は約1,035万 ha で、森林面積に占める人工林の割合（人工林率）は約41%である。つまり、4割の森林は木材生産を目的として人為的に植林されたものである。

福島県は県土面積の約71%に当たる約97.2万



北限域のアカガシ林 南相馬市原町区

写真提供：伊賀和子

haの森林を有する。森林率が高い要因に、県土の約4割を占める会津地方で森林率が高いことを挙げることができる。千葉県より広い会津地方の森林率は約82%、さらに南会津地域だけに限ると森林率は約93%にも上る。したがって、森林区域を緑色で色分けすると福島県は緑色が卓越し、南会津地域は全域が緑色に染まる。

また県内森林の保有形態は、国有林42.1%、民有林57.9%（私有林、公有林等の総数）となっている。人工林率は35.1%で、全国値とほぼ同等と見ることができる。

森林の保護

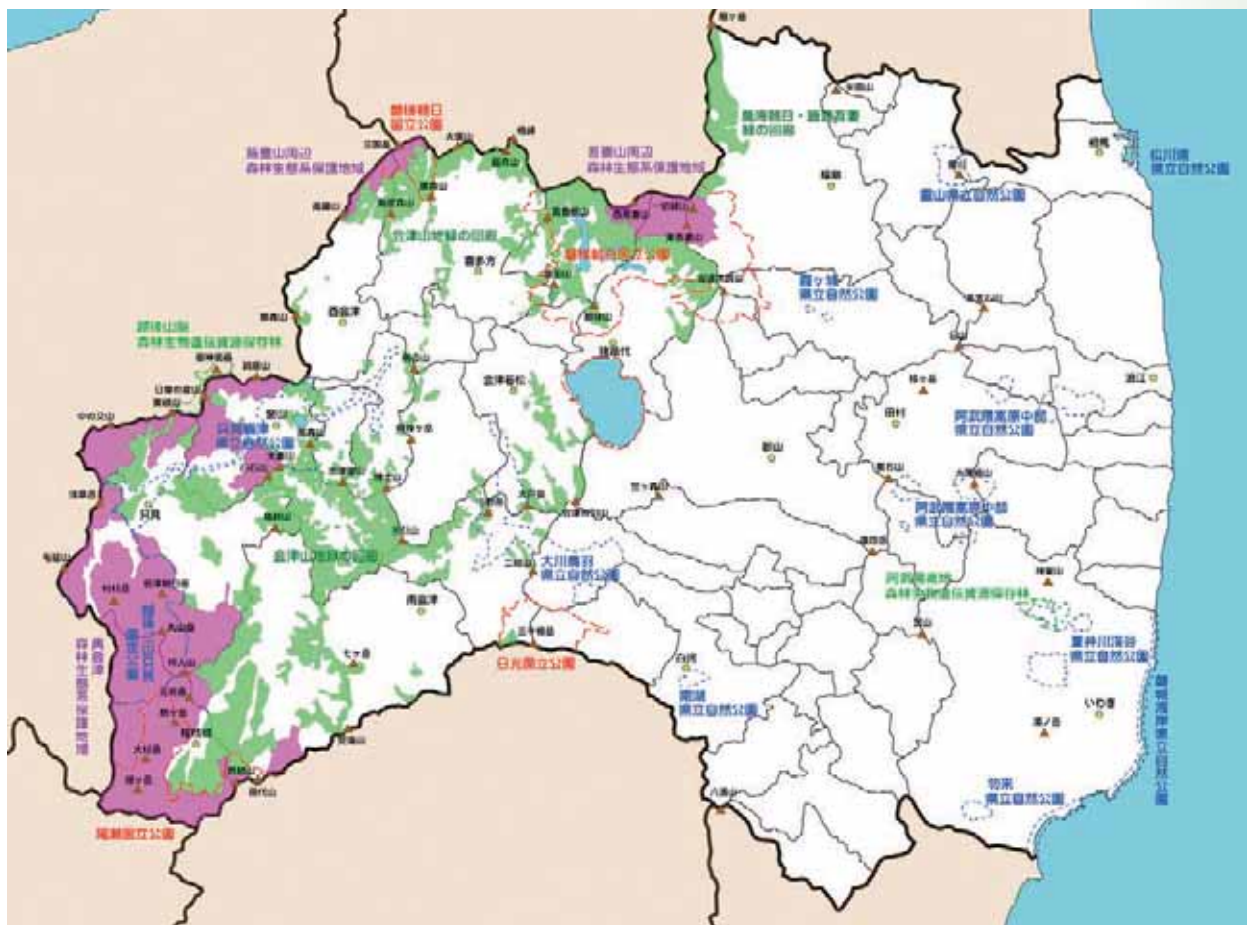
- 森林生態系保護地域・緑の回廊 -

林野庁は1915（大正4）年すでに国有林野の保護林制度を発足させていたが、生態系保護の観点から1989（平成元）年に保護林制度の見直しが行われた。この制度改革により、それまでの保護林

区分体系が一新されることになる。つまり、森林生態系保護地域と森林生物遺伝資源保存林が新設され、保護林は「森林生態系保護地域」「森林生物遺伝資源保存林」「林木遺伝資源保存林」「植物群落保護林」「特定動物生息地保護林」「特定地理等保護林」「郷土の森」の7種類に区分された。

「森林生態系保護地域」は、日本の森林帯を代表する原生的な天然林やその地域でしか見られない希少な天然林を保護することを目的に国有林内に設けられている。ここには保存地区と保全利用地区の2種区が設定された。保存地区では原則人手を加えず自然の推移に委ねられる。保全利用地区は保存地区の森林を外部の影響から守る緩衝の役割を担う。

「森林生物遺伝資源保存林」は森林生態系を構成する生物全般を対象として、それらの遺伝資源を生態系内で広範囲に保存するために指定された地域である。



福島県内の森林生態系保護地域・緑の回廊 関東森林管理署管内図などを基に作成

近年森林生態系保護地域や森林生物遺伝資源保存林等を回廊のように森林で結び、野生動植物が自由に移動できるように「緑の回廊」が設定された。これにより個体群の保全や遺伝的多様性の確保が期待される。

森林生態系保護地域は、平成21年4月1日現在全国に29ヶ所設定されている。福島県内には飯豊山周辺森林生態系保護地域、奥会津森林生態系保護地域、吾妻山周辺生態系保護地域の三地域がある。また、越後山脈森林生物遺伝資源保存林と阿武隈高地森林生物遺伝資源保存林が指定され、さらに会津山地緑の回廊と鳥海朝日・飯豊吾妻緑の回廊が設定されている。会津山地緑の回廊は里山も含めて設定されたため、会津地方の国有林は、森林生態系保護地域、森林生物遺伝資源保存林、緑の回廊のいずれかに含まれることになった。会津山地緑の回廊は県内国有林面積の約4分の1に当たる約105,000haに及び、全国24ヶ所の緑の回廊の中で最大規模である。

林木遺伝資源保存林には津島マツや赤井岳ヒノキなど7ヶ所、植物群落保護林として飯豊スギや雄国沼湿原など9ヶ所が設定されている。緑の森には博士山と只見・恵みの森がある。

優れた自然の風景地を保護するため国立公園・国定公園・県立自然公園が設けられている。公園内の指定地域では森林やそこに生息する動植物が

保護される。県内には、磐梯朝日国立公園、尾瀬国立公園、日光国立公園の3つの国立公園があり、さらに「越後三山只見」の国定公園がある。また、県立公園には只見柳津県立自然公園、大川羽鳥県立自然公園、霊山県立自然公園、霞ヶ城県立自然公園、南湖県立自然公園、奥久慈県立自然公園、松川浦県立自然公園、阿武隈高原中部県立自然公園、夏井川溪谷県立自然公園、磐城海岸県立自然公園、勿来県立自然公園の11区域が指定され、人々に潤いと活力を与えている。



博士山山頂のブナ林 柳津町



緑の森に指定されている「恵みの森」 只見町布沢

ふくしまの森林をつくる樹木

天然スギ

スギは日本を代表する常緑高木の針葉樹で、林業樹種として最も盛んに植林されている。その割合は全人工林面積の43%を占める。杉は適度の強度と耐朽性があり、板目に沿って割裂しやすいため古代から建築用材として選択的に用いられてきた。登呂遺跡では竪穴式住居・高床式建物の建築材、水田の畦や水路を区画する杭や矢板やいたにスギが使われている。また、スギ材は吸水すると膨張して防水に優れるので、船舶、樽、桶、升などの製造に重用され、樹皮は屋根葺きに、葉は粉末にして線香の原料に用いられてきた。

1709年に刊行された貝原益軒著『大和本草』やまとほんぞうの杉の項目に「木直なり、故にスギという」の記述が見られるように、スギの名は幹が真っ直ぐに伸びる木、つまり直ぐ木すきから来ていると考えられる。葉は鎌形にやや湾曲した針状で枝にらせん状に付き、針葉は枯れても脱落せず小枝ごと落ちる。花は単性花の雌雄同株で、前年夏の平均気温によって花芽の分化がおこる。そのため夏の平均気温が25℃以上の高温で雄花芽に分化し易く、前年に真夏日が多いと翌年春の花粉飛散量が増えるとされる。

わが国の天然スギは、青森県あじがさわ鱒ヶ沢町を北限、鹿児島県屋久島を南限として分布している。緯度差は10度以上あるのでスギは気温的に適応域が広いと言える。また、天然スギの集中分布域は年降水量2,000mm以上の多雨地域とよく一致している。分布密度の低い地域を含めても年降水量1,600mm以上の地域に限られている。天然スギとは、実生、伏状、倒木などの天然更新により後継樹が生育するものを指す。天然のスギは古くから伐採され、また植林が繰り返されてきたので人為が加わる前の天然スギ生育域を明



枝打ちが整ったスギ人工林 金山町本名

らかにするのは難しい。現在集中分布が認められるのは、青森・秋田地方、北陸や山陰の日本海側地域、佐渡島、福島県会津地方西部、伊豆半島、紀伊半島、高知県魚梁瀬地方やなせ、屋久島などである。生育する地域により形態・生態並びに木材製品の特性が異なるため、秋田杉、飯豊杉、吉野杉、魚梁瀬杉、屋久杉等地名を冠して地域品種と呼ばれることが多い。

スギ科は世界に9属16種現生しているが、日本にはスギ属1種のみが自生している。それが、日本固有種の学名クリプトメリア・ヤポニカ (*Cryptomeria japonica*) の「スギ」である。スギは少なくとも新第三紀鮮新世(約500万年前)以後から日本列島に分布し始め、第四紀の数回の氷河期を生き延びた「第三紀の残存植物」と見なされている。最終氷期最盛期(約25,000~15,000年前までの間)に若狭湾や伊豆半島などに逃避していたスギが、晩氷期(約15,000~10,000年前までの間)の温暖化により生育域を北上させたとする説がある。それは、若狭湾逃避のスギは日本海岸沿いに北上して約3,000年前に東北地方北

部に達し秋田スギの祖先となり、伊豆半島逃避のスギは太平洋岸沿いに北上し約1,500年前に仙台付近に到達したとするものである。猪苗代湖北西の赤井谷地湿原^{あかいやち}では、花粉化石から約5,000年前にスギが増加を始めたことが認められる。このスギは北上の移動速度から日本海側からの侵入と推測されている。

天然分布域が太平洋側と日本海側にそれぞれの一連分布として認められるのは、このような植生の変動を反映したものと言える。両者には形態変異が認められ、日本海側のスギを「ウラスギ」、太平洋側のスギを「オモテスギ」と呼んで区別されることがある。これは、生育環境、特に気候圧によって品種の分化が起こったと捉えることができる。つまり、ウラスギは冬季多湿の多雪地帯に、オモテスギは夏季多湿の温暖な地域に適応したものである。一般にウラスギはオモテスギに比べて耐陰性が強く、枝は下垂して雪をかぶって枝が地につくと、そこから発根して新たな独立木となる伏状更新^{ふくじょうこうしん}が行われる。一方、オモテスギでは天然下種による実生更新が見られる。また、ウラスギの針葉は小枝先端に向って湾曲し感触は柔らかいが、オモテスギの針葉は直線的で触ると痛いなどの違いが見られる。

福島県会津地方には、飯豊スギ^{いいで}、本名スギ^{ほんな}、吾妻スギ^{あづま}の天然スギ(単に「天スギ」とも言う)の地域品種がある。飯豊スギは、福島、新潟、山形にまたがる飯豊連峰の福島県側の山系に分布する天然スギの総称である。喜多方市山都町鳥屋森山の稜線部一帯と西会津町奥川北西稜線部一帯に集中分布が見られる。分布域はすべて国有林である。学術研究または造林用の種源として保存する必要

から、飯豊スギ遺伝子資源林(母樹林)が設定されている。飯豊スギの特徴は、尾根筋に分布が多く沢筋はわずか、二畳紀 - ジュラ紀堆積岩類(大戸層)や白亜紀後期花崗岩類の基盤岩に分布、標高300~1,000m程度に分布し標高700m以上の稜線部に最大分布、林冠ギャップから陽光が入ると稚幼樹は急速に上長生長を始める、樹皮はシロハダが多い、針葉は湾曲、枝の出方は水平上向きが最多で次いで下垂型、多くが伏状による天然更新をする等を挙げることができる。



現在の天然スギ分布 塚原(1980)・宮島(1994)などを基に作成
天然スギの分布は年降水量2,000mm以上の地域とよく一致している。

尾根筋に線状に分布するポドゾル性土壌域と天然スギの列生が見事に一致している。スギ植生地が尾根筋などの急斜面に限られるのは、一般に地形的・土壌的極相と捉えられる。スギは元来鉱物質土壌でのみ実生更新の機会が確保できる。またポドゾル性土壌は根返りや斜面崩壊などの地表攪乱かくらんにより鉱物質土壌が露出し易い。こうしたことから尾根筋に偏在するのはスギが地表攪乱に依存しているためと見ることもできる。



尾根筋に列生する飯豊スギ 喜多方市鳥屋森山周辺

本名スギは、大沼郡金山町本名の霧来沢流域並び大石田沢流域に自生する天然スギである。狭域に限定して「三条スギ」とも呼ばれる。旧本名村では明治維新前から酒桶材料に天然スギの大径木を伐採していたが、乱伐のため大径木が少なくなり明治35年村民が禁伐にしたので天然林が残ったと言われる。標高400～900mの第三紀凝灰岩及び流紋岩基盤岩の上に分布している。



ウラスギ系統の鎌状針葉
西会津町奥川



オモテスギ系統の直線状針葉
浪江町赤宇木

コラム 土壌の生成

土壌断面を見るといくつかの層から成り、断面の下には土の材料となる岩石（母材）^{ぼさい}やその風化物があり、上にいくにつれて土が生成されている。

岩石は物理的風化作用によって細粒となり、さらに化学的風化作用で変質して土壌物質となる。土壌物質に地衣類・コケ類が生育すると、分泌する酸によって無機物は分解され維管束植物が生長するための養分ができる。生育した維管束植物の遺骸は腐植として土の中に残される。こうして土壌物質は土に変わり土壌が生成される。

土壌断面の形態は腐植の集積状態と土中の水の運動タイプの組み合わせで決定されるが、これに影響を与えているのが母岩の種類、気候、生物、地形、時間、人の営力である。土の色には、黒、白、赤、茶、青などがある。黒い色は植物由来の腐植によるもので、赤・褐・黄・青などは鉄成分の化合形態の違いに由来する。また白色は腐植も鉄も少ないことによる。このように土の色は土の成因に関係している。



たしろやま たいしやくさん
田代山から帝釈山にかけての登山道に見られる土壌断面(母材は火砕流堆積物)

林野土壌は土壌断面の特徴層位の配列と性質によって、ポドゾル、褐色森林土、赤・黄色土、黒色土、暗赤色土、グライ、泥炭土、未熟土の8土壌群に分類される。さらに土壌亜群、土壌型、土壌亜型のカテゴリーで細分される。

ポドゾル (podzol) とは、ロシア語の“下に”を意味する“ポド”と“灰”を意味する“ゾラ”からできた言葉で、堆積腐植層の下に特有な灰色の土層を有する土壌を指す。ポドゾルはタイガ樹林下に典型的に現れる土であるが、酸性腐植を含む水が土壌物質から鉄を溶解して流失させたため、腐植と鉄の溶脱した土壌物質が混じり合って灰色を呈している。

当地方の年降水量は2,000mm以上である。特徴として結実量が極めて少なく一般に伏状性を有する、耐陰性が強い、幼樹期に生長が緩慢でも大径木となると生長旺盛で年輪幅が揃う、心材の色は赤褐から黒褐、針葉が長い等を挙げることができる。耐寒耐雪性に優れたウラスギ系統であるが、形態的に大きな変異を持った地域品種である。

北塩原村早稲沢の天然スギは、西吾妻山を源流とし桧原湖に注ぐ吾妻川流域の山腹に分布することから「吾妻スギ」と呼ばれる。生育地は標高1,000~1,700mで、白亜紀前期花崗閃緑岩及び前期中新世玄武 - 安山岩火砕岩基盤岩の上に分布している。年降水量は2,000mmを超え、年平均気温7.5以下で高山寒冷地帯に適応した品種と言える。枝条が下垂して地表を匍匐し発根している林分も見られる。

ブナ

ブナは日本の温帯落葉広葉樹林を代表する樹種である。ブナ属は、マテバシ属・シイ属・クリ属・コナラ属などとともにブナ科を構成している。コナラ属、シイ属、マテバシ属の堅果（果実）は“ドングリ”として親しまれている。ブナもソバの実に似た2つの堅果を結実し基部はクリのいかに当たる杯状の殻斗で囲まれる。現生のブナ属は約11種が認められ、ヨーロッパ（2種）と北米（2種）、東アジア（7種）に分布している。日本にはブナ *Fagus crenata* とイヌブナ *Fagus japonica* の固有種がある。ブナ属の化石はユーラシア大陸と北米大陸の現在の温帯域から亜寒帯域にかけて産出し、今までに20種以上が報告されている。もっとも古い化石は今からおよそ3,300万年前ごろの新生代漸新世初期に遡ることができる。この時期、白亜紀から続いた暖かい気候が急激に寒冷化し、常緑広葉樹の森林が縮小するとともに、落葉広葉樹の森林が分布を広げた。日本のブナ属化石は漸新世以降の地層から産出する。ブナとイヌ

ブナは第四紀になって現れたものである。最終氷期においては、ブナは現在の新潟・仙台を結ぶライン以南の日本海側と太平洋側の海岸線に避難していたと考えられている。それが、晩氷期から後氷期にかけての気候の温暖化により本州内陸部・北部に分布を拡大するようになる。磐梯町法正尻湿原では12,000年前頃からブナ属の花粉化石が出現し始めている。

ブナは北海道渡島半島黒松内低地帯を北限とし、南限の鹿児島県大隅半島高隈山まで、日本に広く生育している。今日では断続的分布になっているが、人為の影響が加わる以前は日本列島の山地中腹を広く覆っていたと考えられる。福島県では標高およそ400~1,500mのところに生育し、しばしばブナの純林をつくっている。樹高は約30mに達し、樹皮はつるつるして明るい灰色、しばしば地衣類の着生によって斑紋ができる。一方、イヌブナは岩手県から宮城県までの主に太平洋側に分布している。また、ブナより標高が低いところに多く、ブナのような大規模林にはならない。樹皮は多少ざらざらして黒っぽい灰色で地衣類はあまり付かない。この木肌色のためイヌブナはクロブナ、ブナはシロブナとも呼ばれる。

ブナは古くから漆器素地、足駄歯、杓子、家具材などに使われてきたが、その利用規模は小さかった。それはブナ材に狂いが多いことや変色・腐れが入りやすいためであった。特に戦後は無用



志津倉山のブナ 三島町

の木材、拡大造林の名の下奥地のブナ林まで伐採され、ブナにとって受難の時代が長く続いた。現在は白い材と粘り強い材質が見直され、また乾燥・加工技術が進歩して用材価値を上げている。さらにブナ林の森林生態系や河川生態系の成立に果たす役割や水源涵養機能が広く認知されるに至り、その重要性が理解されるようになってきた。

福島県では県内各地でブナ林を見ることができ、とりわけ原生的で広大なブナ林は会津地方に多い。只見町では浅草岳東方の沼の平や田子倉湖周辺、黒谷川上流域、^{ふざわ}布沢から昭和村にかけての境界域に広く分布している。中でも越後三山只見国定公園及び只見柳津県立自然公園内には約24,000haのブナ原生林がある。この規模はユネスコの世界自然遺産に登録されている白神山地中心部のブナ林面積約17,000haを凌ぐ。布沢のブナ林「恵みの森」は、郷土の自然のシンボルとして林野庁の“郷土の森”に指定され保護されている。

只見町の1908～1995年までの年平均降水量は2,313.6mmで、3,000mmを超える年も見られる。降水量の年変動は1月・12月と7月をピークとする二山型を示し、夏季の降雨とそれに劣らない冬季の降雪が年降水量に大きく関わっている。1964～1995年までの月平均降雪量統計では、最も多い月は1月で437.2cmを示す。また1976（昭和51）年1月はこのひと月だけで738cmの積雪量を記録し



雪食地形急斜面下のブナ林限界 只見町浅草岳東側

ている。

このような多雪気候は、ブナの形態や生活史に大きな影響を与えている。太平洋側と日本海側ではブナの葉の大きさや硬さが異なっている。最も大きい東北北部や北海道のブナの葉の面積は太平洋側のブナに比べて3～4倍もある。このため日本海側のブナはオオバブナ、太平洋側のブナはコハブナと呼んで区別されることがある。日本海側では開葉した後まで雪が残り雪解け水によって土壌が潤されるので、薄く大きな葉は効率的な光合成に適応していると考えられている。また、日本海側のブナの実生は太平洋側に比べ多い。これは前年に落下した種子が雪で覆われ、ネズミ類の食害を免れるため種子生存率が高まるためと考えられている。

天然マツ（津島マツ）

浪江町の旧津島村 ^{くぬぎだいら} 檜平付近に生育する天然マツは、「津島マツ」と呼ばれ全国に名高い。津島マツはアカマツの地域品種である。藩政時代には大径木が將軍家の建築用材として献上され、良質木は「帳付松」として伐採が禁止された。歴史のある津島マツであるが、樹齢何百年という大径木はすでに殆ど伐採され、今は尾根筋にわずかに見られるだけである。檜平国有林内に津島マツの林木遺伝資源保存林3.43haがあり保護されている。



ブナ幼樹の密集区 喜多方市黒森山

しおびて
塩浸林道入口付近には展示林が設定され、適切な施業が行われた津島マツ林を見ることができる。津島マツの特徴として、枝が枯れ上がって枝下高が高く枝も細いこと、樹冠が小さいこと、樹幹が通直・完満でマツヤニが少ないこと、さらに年輪が均一で緻密、心材の色が美しく材は軽軟で工作しやすいことを挙げることができる。

津島マツは白亜紀前期花崗岩を母岩とする地帯に生育している。鉱物質土壌で実生更新がなされることから、天然スギ同様地表攪乱に依存してい



真砂土の実生マツ 浪江町塩浸

ると見ることができる。塩浸林道脇の露頭には花崗岩が風化した砂礫「マサ」が観察でき、その近辺ではマツの実生密集が見られる。



林木遺伝資源保存林内の津島マツ 浪江町赤宇木

コラム 固有種、第三紀の残存種（遺存種）

世界中でその場所にしか生息・生育していない生物を固有種という。陸地から隔絶された大洋島では、陸地の生物との接触がほとんどないため独自の生物相が発達し固有種がみられる。ガラパゴス諸島や小笠原諸島はその好例である。

また地質環境に適応してその場所にのみ生育する植物が見られる。蛇紋岩はクロムやニッケル、マグネシウムを多く含有するので多くの植物で生育障害となる。しかし、ほぼ全山蛇紋岩から成る岩手県早池峰山には、クロム・ニッケル等に耐性を持つように進化したハヤチネウスユキソウ、ナンブトラノオなどの固有種が生育する。これらの植物は蛇紋岩植物と呼ばれる。

日本にだけ生息・生育する固有種として、ニホンカモシカ、ニホンザル、シラネアオイ、キヌガサソウ、ワサビ（学名：*Wasabia japonica*）コウヤマキ、ヒメコマツ、ツガなどがある。日本に生育する約6,500種の維管束植物のうち約35%に当たる1,950種、また日本に生息する哺乳類91種のうち46種は日本固有種と考えられている。



自生のコウヤマキ 西会津町竜ヶ岳

コウヤマキ（高野楨）は日本固有の常緑針葉樹の高木である。近年までスギ科に属していたが現在はコウヤマキ科の1科1属1種である。高野山に多く見られたことから名付けられたと言われる。福島県から九州のおよそ7ヶ所に分布が限られ、それぞれ隔離分布している。福島県西会津町安座は北限になっている。コウヤマキは第三紀にはユーラシア大陸北部に広く分布していたが、新生代第四紀の氷河期に大陸のものは約200万年前に絶滅し、日本列島にだけ遺存した残存種である。新生代第四紀の数回にわたる氷期を生き延びた生物を第三紀の残存種（遺存種）と呼ぶ。ニッコウキスゲやリュウキンカも残存植物である。

アカマツ人工林

半田山は、幕藩時代佐渡の相川、^{たじま}但馬の^{いくの}生野と並び日本三大銀山に称せられた半田銀山があったことで知られる。現在半田山は手入れされたアカマツ等の人工林に覆われているが、これはほぼ百年に亘る植栽・治山事業の賜物である。

半田山は明治35～37年、山の東側半分で直径約1kmの大規模な陥没地滑りが発生し、土砂が露出した大きな馬蹄形陥没地形の荒々しい山容と化した。この時山腹にあった旧半田沼は消滅し、その南に現在の新半田沼が誕生している。この地滑りにより下流の人家約30戸、鉾山長屋26棟の移転が必要になった。さらに明治43年の豪雨で半田沼は決壊して、下流山麓一帯は濁流に吞まれ耕地・人家に甚大な災害が発生した。その後もしばしば地滑りが発生している。

洪水災害翌年の明治44年から復旧工事が始まった。当初は福島県補助事業として旧半田村直営工事であったが、大正11年から福島県直営工事となり昭和52年まで続いた。この復旧事業は福島県初の治山事業となった。当初は荒廃地の植栽に重点が置かれ、明治44年～大正9年までの間に、アカマツやヒノキ、スギなど140万本を超える植栽が行われている。かつての禿山は長年の苗木植栽や地盤保護工事などにより安定した林相に戻っている。



アカマツ人工林 桑折町半田山

トチ

北海道や本州日本海側の湿った沢筋には、サワグルミやトチノキなどの落葉広葉樹が優占する林が見られる。林床にはシダ類の多いのが特徴である。

^が崖錐地形にもトチノキの自然林が見られる。福島県会津地方の多雪地帯では雪による布状侵食で形成された崖錐地形が多く、多湿、富栄養、好通気性の土壌を好むトチノキが多く生育することになる。

トチの種子はアクが強いので食べるにはアク抜きが必要である。面倒な手間がかかるが、トチは毎年安定した数の実をつけるので、山間地では農作物の不作の年に限らず食糧として利用されてきた。

キリ

キリは有用材として古くから植栽されてきた。北海道南部から全国至る所で見られる。自生地は確実に分かっていない。桐材として会津桐は南部桐（岩手県）と等しく名高い。「娘が生まれたら桐を植え、嫁入りにそれで^{たんす}箆笥を作れ」と言われるほどキリの成長は速い。

キリ材の特長として、水に浮くほどとても軽い、軽い割に適度の強度があって割れや狂いが少ない、湿気を吸っても材が膨張せず狂いが少ない、柔らかいので加工し易い、防火にも優れる等



地元小学校の学校林 桑折町半田山

を挙げることができる。「錐通す霧は通さず桐の箱」とはこのような性質を言い当てている。

これらの特長を活かして、箏箏、^{ながもち}長持の和家具

から火鉢、膳などの漆器木地、襖の骨、天井板、^{じゅうき}什器箱、琴などの楽器、下駄、ピンポンラケット等多種多様の製品が作られている。



トチの花 柳津町胄中



トチの実 喜多方市押切川公園



新月伐採で伐り出されたトチノキ（部分）



伐採前のトチ 三島町浅岐
水の吸い上げの少ない10月の新月の日を選んで伐採された。大勢の見学者が見守った。樹齢300～320年、樹高25m。

資料提供：武石文敏



伐り出されたキリノキ（部分） 金山町上田産



キリの花
喜多方市諏訪

コラム 地衣類

ブナの幹には多くの場合コケ植物、藻類、そして地衣類が着生している。地衣類は菌類と藻類の共生生物である。木の幹や岩の上、地面など至る所に樹状、葉状、^{かじょう}痂状（かさぶた状）の地衣類を見ることができる。ウメノキゴケやサルオガセは代表的な地衣類である。

菌類が地衣体を構成しその中に単細胞の藻類が共生している。菌類と藻類は互いに養分のやり取りをして共に利益を得ている。菌類とは“キノコ”や“カビ”の仲間である。

樹皮などに付着し木のように立ち上がったたり垂れさがったりするのが樹状地衣で、サルオガセ類が含まれる。木の葉のような形で基物に付着するのが葉状地衣で、ウメノキゴケ類が代表として挙げられる。痂状地衣は基物の表面にべったりと付着する。白や灰色、暗緑色などの色を呈する痂状地衣がブナの幹に着生することにより、大小の斑紋がモザイク模様を呈する。



ブナの樹皮に斑紋をつくる痂状地衣
北塩原村雄子沢

多雪地帯のブナ林では、幹の中部・下部にコケ植物や葉状地衣、樹状地衣の着生が見られない。これは雪融けによって着生が剥離されるからである。したがって、着生の境界を見れば最大積雪深が分かる。

地衣類はリトマス試験紙や衣類の染料、香水、薬品などの原料に使われているが、将来ある種の地衣類から有用な成分が抽出され人間社会に応用されないとも限らない。その意味で地衣類は遺伝子資源と言える。

ところで共生の顕著な例は、植物の根と共生体を形成するVA菌根菌である。この菌類が共生しなければ植物は生育できない。VA菌根の化石が約3億7,000万年前のシダ植物の根から発見されており、植物が陸上に進出するためには菌根菌との共生が必須だったことが示唆される。

ふくしまの“まちな木”

福島県内の59市町村の木

県内59市町村ではそれぞれ親しみを込めて「まちな木」を選定している。桑折町と天栄村は2樹種を選定している。伊達市は未定である。

最も多い樹種はアカマツで13市町村が選定、次いでスギ6市町、3位は種を特定しない「マツ」で5町村となっている。アカマツ、クロマツ、マツを1グループにすれば20市町村が選定している

ことになる。また針葉樹と広葉樹に分けるとほぼ同数の市町村数となる。

選定理由には、身近で馴染み深いこと、他地域で見られない当該地域特有の木であること、町名に由来する木であること、さらにまちな木の発展・隆盛を樹木や木材の性質・特性にあやかるとともに、

ともかく“まちな木”は地域住民と樹木との深い交わりを象徴していると言える。

市町村名	まちな木	市町村名	まちな木
1 福島市	ケヤキ	31 喜多方市	イイデスギ
2 二本松市	サクラ	32 北塩原村	オオヤマザクラ
3 伊達市	未定	33 西会津町	キリ
4 本宮市	マユミ	34 磐梯町	コブシ
5 桑折町	アカマツ、カヤ	35 猪苗代町	ナナカマド
6 国見町	アカマツ	36 会津坂下町	サクラ
7 川俣町	カエデ	37 湯川村	イチヨウ
8 大玉村	マツ	38 柳津町	ヤナギ
9 郡山市	ヤマザクラ	39 三島町	キリ
10 須賀川市	アカマツ	40 金山町	キリ
11 田村市	ナラ	41 昭和村	ヒメコマツ
12 鏡石町	シダレザクラ	42 会津美里町	エンジュ
13 天栄村	エンジュ、マツ	43 下郷町	シラカバ
14 石川町	スギ	44 檜枝岐村	ヒノキ
15 玉川村	アカマツ	45 只見町	ブナ
16 平田村	アカマツ	46 南会津町	ブナ
17 浅川町	アカマツ	47 相馬市	クロマツ
18 古殿町	スギ	48 南相馬市	ケヤキ
19 三春町	シダレザクラ	49 広野町	サクラ
20 小野町	スギ	50 檜葉町	スギ
21 白河市	アカマツ	51 富岡町	サクラ
22 西郷村	カシワ	52 川内村	モミ
23 泉崎村	イチヨウ	53 大熊町	モミ
24 中島村	アカマツ	54 双葉町	センダン
25 矢吹町	アカマツ	55 浪江町	マツ
26 棚倉町	マツ	56 葛尾村	アカマツ
27 矢祭町	アカマツ	57 新地町	マツ
28 塙町	スギ	58 飯舘村	アカマツ
29 鮫川村	シラカバ	59 いわき市	クロマツ
30 会津若松市	アカマツ		

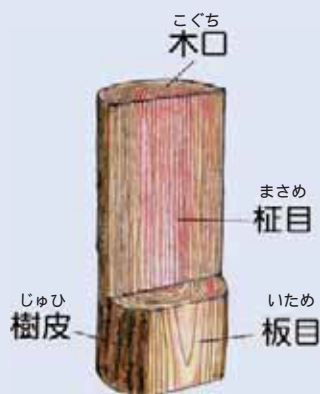


福島県内59市町村の“まちな木”

コラム 木材の切り口に見られる木目

^{まさめ} 柾目（正目）とは、幹の中心を通る切り口に現れる木目である。
 ^{いため} 板目とは、幹の中心を通らない切り口に現れる木目を言う。柾目のきれいな
 ^{しまもよう} 縞模様に対して、板目は不規則な曲線模様となる。
 ^{こくち} 木口は幹を横に切った切り口を言う。木口には年輪が見られる。樹皮は幹の形成層から外側の部分である。ここには
 ^{しぶ} 篩部繊維組織やコルク層があって幹を保護している。原木の丸太は樹皮を剥がされ、角材・板材に製材して用いられる。

樹種ごとに柾目・板目・木口の色調や風合いが異なり、その特徴に応じた木材の利用がなされる。また、樹皮は樹種ごとに異なるので樹木を見分けるポイントにもなる。ただし、同じ樹木でも若木、成木、老木では
 ^{きはだ} 木肌が異なるばかりか、生育環境でも樹皮に変異が見られるので注意が必要である。



スギ樹齢板
 旧所有：龍福寺
 所蔵：奥会津博物館
 L166cm×H132cm×D7cm
 年輪から樹齢178年と読み取れる。南会津町系沢に1765（明和2）～1943（昭和18）年まで生育。

ふくしまの大きな木

巨木

大きな木には荘厳な空気が漂い、訪れた者は自然と畏敬の念を抱く。それは何百年何千年もそこにずっと生き続けた生き物に計り知れない生命力を感じるからであろう。日本では、大きな木には神や精霊が宿るものとして大切に守られてきた。

背の高い木や幹の太い木を大木、巨木、^{たいぼく きよぼく きよじゆ}巨樹などと呼んでいるが、正式な定義はない。1988年、当時の環境庁は全国巨樹・巨木調査を実施するに当たり、「地上から1.3mの位置での幹周り（^{きようこうしゅうい}胸高周囲）が3m以上、地上1.3mの位置で幹が複数に分かれている場合は個々の幹の幹周りの合計が3m以上で、そのうち最も太い幹の幹周りが2m以上」を巨木と

した。2000年には2回目の調査が行われ合計約68,000本の巨木リストが作成された。福島県では869件が登録されている。会津若松市の「^{たかせ}高瀬のオオケヤキ」ほか11件の国指定天然記念物、南会津町伊南の「^{ふるまち}古町のオオイチョウ」ほか52件の県指定天然記念物、南会津町田島「^{しおえ}塩江の五本松」ほか163件の市町村指定天然記念物もここに含まれている。

また林野庁では、国有林にあって次世代に残すべき巨木を「森の巨人たち百選」とし保護活動を行っている。県内では西郷村の剣桂と呼ばれるカツラほか4本が選定されている。福島県では、郷土の巨樹・名木を「緑の文化財」に指定し未来に継承しようとしている。西会津町如法寺の^{にょほうじ}コウヤマキや桑折町万^{こおりまちまん}正寺の大カヤなどが緑の文化財に登録されている。



温泉神社の大スギ
喜多方市熱塩加納町
推定樹齡1,000年
樹高約25m
胸高周囲6.5m



中山の大ケヤキ（八幡の大ケヤキ）下郷町中山
推定樹齡950年 樹高36m 胸高周囲12m



万正寺の大カヤ 桑折町万正寺
樹高15m 胸高周囲7.2m 根周り8.1m



古町の大イチョウ 南会津町伊南
推定樹齡約700年 樹高35m 胸高周囲11m

協力者一覧 敬称略

個人 相田吉則 阿久津英夫 伊賀和子 武石文敏 坪田和人 新国勇
 団体 (株)アイタ工業 奥会津博物館 桑折町産業振興課 佐久間建設工業(株) 福島県農林水産部森林計画課
 福島県林業研究センター 林野庁関東森林管理局会津森林管理署 (株)有紀

引用・参考文献

1 ふくしまの森林

- ・中静透(2004) 森のスケッチ 東海大学出版会
- ・宮島寛(1994) 日本の天然スギ 屋久町立屋久杉自然館
- ・塚田松雄(1980) 杉の歴史：過去一万五千年間。科学 Vol.50、 9、p538 - 546
- ・林弥栄(1960) 日本産針葉樹の分類と分布 農林出版
- ・千葉県立中央博物館(1992) プナ林の自然誌
- ・山形県立博物館(1997) プナの森への招待状
- ・宮脇昭(編著)(1986) 日本植生誌東北 至文堂
- ・武内和彦(1999) 日本の森林。日本の自然。p117 - 131、放送大学教育振興会
- ・武内和彦(1999) 日本の里山。日本の自然。p133 - 143、放送大学教育振興会
- ・只見町教育委員会(2003) 只見町文化財調査報告書第9集 福島県只見地域の森林植生並びに生物多様性に関する学術調査 - 特にブナ、サワグルミ林の遺伝機構解析 -
- ・只見町史編纂委員会(2001) 只見町史資料集第4集「会津只見の自然」植物編
- ・山根一郎(1980) 土の種類と生成。科学 Vol.50、 9、p573 - 580
- ・鈴木三男(2002) 日本人と木の文化 八坂書房

主な展示資料

	展示テーマ	資料名	数量	採集地	所蔵者
1	ふくしまの森林の成り立ち	本名スギ輪切り原木(径43cm×190cm)	1	金山町本名	福島県林業研究センター
2		トチノキ輪切り原木(径120cm×250cm)	1	三島町浅岐	佐久間建設工業(株)
3		キリ輪切り原木(径92cm×300cm)	1	金山町上田	佐久間建設工業(株)
4		スギ樹齡板(L166cm×H132cm×D7cm)	1	南会津町糸沢	奥会津博物館
5		イヌワシ剥製	1	会津若松市	福島県立博物館
6	ふくしまの森林をつくる樹木	樹木サンプル ブナ(径14cm×63cm)ほか	30		福島県林業研究センター
7	ふくしまの“まちの木”	福島県地図ジグソーパズル	1		福島県立博物館 (株)アイタ工業製作

第2章

森林の履歴



原始・古代の人々は、森の資源をどのように利用し、暮らしの中に生かしていたのか。

遺跡の中から出土した資料をもとに、人々と森との関わりを見てみましょう。

ふくしま森林文化企画展に 参加するにあたって

福島県文化財センター白河館（愛称 まほろん）

館長 藤本 強

まほろんは県南の白河市にあります。福島県が実施してきた埋蔵文化財の調査によって得られた資料を保管し、活用している施設です。その一環として資料の展示と体験学習を行っています。

日本列島は、現在でもそのほぼ3分の2が森林で覆われているという自然をもっています。これは過去にさかのぼっても森林がより広がったことはあっても、狭かったことはありません。このような自然に暮らしていた昔の人々は森林を毎日の生活の中に取り入れて暮らしてきました。縄文時代は森の恵みをたよりに暮らしていたということができましよう。水田稲作が導入された弥生時代以降でも、衣・食・住の多くの面で森林の中の資源を利用した生活が続いてきました。日本古来の文化は森林あつての文化です。そこで繰り広げられた暮らしをもう一度考え直すことも必要ではないかと考えています。

まほろん特別展示室での展示と古代のきこり体験などの体験学習やまほろん古代の森の散策を通して、これらを考え直すヒントを提示していきます。参加してみませんか。

1 森を拓く

旧石器時代の石斧

今から12,000年前以上の日本は、現在より寒冷的な気候のなかにあり、最終氷期と呼ばれていた。日本の最終氷期の中で一番寒かったのは、20,000年ほど前と推定されており、現在より6～8度程度平均気温が低かったと推定されている。海面が現在より約100m程低く、列島は一部大陸と繋がっていて、動物や人類の移動も想定されている。

寒冷的な気候の中、発見される石器類から、狩猟を基本生業とした小集団の人類の営みが考えられているが、今から25,000年前頃の日本の各地、200箇所以上で、礫を打ち欠いて作った、他の石器に比べてやや大型の石器の先端部を磨いて刃を付けた石斧が出現し普及する。

日本の最終氷期の中でも、23,000年ほど前に降り積もった始良 tn 火山灰 (AT) 直下は、関東地方では黒色帯が発達し、寒冷的な中でも比較的温暖的な気候があったことが判っており、その時期に刃を磨いた石斧が普及していることは注目すべきことである。

人々は、今から25,000年ほど前の温暖化の中で広がった森林を拓き、その資源を道具や簡単な建築材などとして利用していたのであろう。

その後、鹿児島県の南部で起こった火山の大噴火により、寒冷の時期が再び訪れ、今から12,000年前に縄文時代を迎えるまで、石斧はほとんど姿を消し、温暖化とともに再び出現する。



図1 檜葉町大谷上ノ原遺跡の石器

左端が刃部を磨いた石斧。県内では同じ時期の刃部を磨いた石斧が南相馬市荻原遺跡、須賀川市乙字ヶ滝遺跡、会津若松市笹山原 NO 8 遺跡などで出土している。これらは、鹿児島県の始良カルデラを供給源とされる始良 tn 火山灰 (AT) の堆積以前の層から出土しており、関東地方では、関東ローム層といいつながら、黒色土壌の中から発見されることが多い。まほろんの敷地内で発見された一里段 A 遺跡もほぼ同時代と推定されている。



図2 会津若松市笹山原 NO 8 遺跡の石器

笹山原 NO 8 遺跡は、猪苗代湖の西側の丘陵上に位置する旧石器時代の遺跡である。周囲には、旧石器代の各段階の遺跡が分布しており、笹山原遺跡群と通称されている。写真の右下段2点が打ち欠いた礫の先端を磨いた石斧で、他は、狩猟具や加工具に使われたナイフ形石器などである。遺跡は、地質学的にも猪苗代湖の生成を考えると大変興味深い。

縄文時代・弥生時代の石斧

今から12,000～13,000年前程前から縄文時代が始まるが、旧石器時代に比べて比較的温暖な気候が続き、時代とともに人々は定住の生活を送る。

縄文時代には土器が出現するが、列島に土器が出現する段階に、旧石器時代の石斧に比べて大型で肉厚な長野県神子柴遺跡や青森県長者久保遺跡、福島市仙台内前遺跡に代表されるような伐採や加工用の大型の磨製石斧が各地に出現する。その大型の石斧がどのように変化していったかは不確かであるが、縄文時代には各種の磨製石斧が非常に発達している。

人々は、各種の石斧を用いて、居住地を切り拓いたり、村周辺の森の中から、丸木船、建築材、木製の道具に適した材料を切り出し、加工しているような道具を製作している。

旧石器時代においても、黒曜石の流通のように、地域間や集団間での資源などの流通圏が確立され、列島各地で情報の交換が行われていたが、縄文時代には、石器の材料となる石材の流通だけでなく、アスファルトや貝輪、翡翠製の五類をはじめ多くの資源の流通や広域な情報交換のネットワークが成立、発達していた。生活の中で利用する道具の全てが、村内でまかなっていたわけではなく、一部の物については、特定の地域で多量に製作され、それが広い地域に供給されていることが最近の発

掘調査でわかっている。磨製石斧においては、縄文時代前期後半に蛇紋岩を用いた石斧が富山県で生産され、広い地域に流通していることが判っている。縄文時代中期後半から後期後半にかけては、新潟県の北半部の新発田市上車野E遺跡や奥三面に所在する村上市アジヤ平遺跡などで素材から完成品までの製作工程がわかる磨製石斧製品、未製品、砥石などが多量に出土しており、そこで完成した磨製石斧の多くが隣接県まで含めた周辺地域に供給されていたものと推定されている。

弥生時代には、大陸から新たな文化や技術が流入し、斧においても大型の蛤刃の石斧や加工用の鑿形の石斧が発達している。縄文時代以上に森の資源を利用して、木製の道具を作る技術も大きく進歩している。また弥生時代には、鉄製などの金属製品の出現という大きな変化があった。



図4 縄文時代の磨製石斧



図3 縄文時代の道具復元品



図5 弥生時代の道具復元品

金属器は、弥生時代の比較的早い段階から認められる。弥生時代後期に木製品の加工方法が大きく変化しているのは、弥生時代後半の鉄製品の普及の顕れを背景としているとの見方がある。石斧は列島の北部を除いて弥生時代以降には見られなくなる。石に変わって鉄の道具が主体となったのであろう。鉄の道具の普及は、人々に森の資源の加工を容易にした。それと同時に、豊かな資源である森林の開発も人々に容易にした。縄文時代から弥生時代にかけての人々と森林との共生も、その後は一部で侵されることもしばしばあったことが指摘されている。

2 森から創る

森林の資源は、旧石器時代では不明であるが、縄文時代以降、各種の道具に多種多様に利用されている。

縄文時代や弥生時代の遺跡から出土する木製品を詳しく分析すると、道具によって樹木の種類が異なることが判る。この種類の木は斧の柄に、あの種類の木は建築材にと整理されているのである。これは縄文時代において、人々の中に樹木に対する知識が経験や交差する情報を基に共有化されていたことを表している。

樹木を加工して道具を作るだけでなく漆の樹液の利用も縄文時代前期以降盛んに行われている。木製の器に漆を塗った漆器の他にも、山形県押出



図6 古代の道具と木製品の復元品

遺跡（前期）や三島町荒屋敷遺跡出土品（晩期）のように、土器に漆を塗ったものもある。日本の漆木は中国からもたらされたものと推定されているが、列島の湿潤な気候の中で古くから活用され現在に至っている。

3 森の恵み

日本の森林は、大きく照葉樹林と落葉広葉樹林に分けられており、福島県の大方は落葉広葉樹林の中にある。春に森の息吹とともに木々が芽吹き、夏にはうっそうとした緑の世界が広がる。秋には葉が色づき、晩秋には葉が枯れておち、冬には殺伐とした光景が広がるのが、本県の森の姿である。

森林の中には多種多様の樹木があり、その木を利用して建築材や各種の道具が作られるほか、季節ごとに樹下には食用や薬用となる植物が生え、また森の中には多くの動物が生息している。

春のめづきとともに樹下にはワラビ、ゼンマイなどの山菜が生え、秋には多様なキノコが生息するが、縄文時代後期後半にキノコを形取った土製品が各地で認められるが、これは人々がキノコを食料として利用し、また毒キノコから派生する幻覚作用の神秘性を印象づけたものと考えられている。

秋の森林からは、クリ・クルミ・トチ・コナラなどの食料となるナッツ類が収穫される。多くの遺跡からは、食料としたこうした木の実が出土し



図7 押出遺跡出土彩漆土器

ており、喜多方市上林遺跡では、縄文中期の竪穴住居跡からクリが集中して出土し、三島町荒屋敷遺跡では晩期のトチが、また山形県押出遺跡では、縄文前期のクルミが多量に出土している。縄文時代の主食は木の実と考えられているが、秋の短い



図8 縄文時代のきのこ形土製品



図9 現生のトチ・クルミ

期間に大量に収穫し、処理、保管していたことが想定されている。

森の中には、食料となる植物の他に多くの動物が生息している。春に子孫を増やし、夏にはうっそうとした森林のなかで生息し、秋には冬に備えて活発に食料を求めて活動する。また渡り鳥が飛来するのも秋である。この時期が人々の狩猟の期間である。縄文時代、弥生時代を通じて、狩猟対象の中心はシカ、イノシシであった。遺跡から出土するものには、捕獲して食料とした動物の骨のほか、その骨を利用した道具や、動物儀礼に關与したと推定される動物形の土製品や獣面付き土器のように、土器の一部に動物の意匠を表現したのものもある。



図10 獣面付き土器（縄文前期）

協力者一覧 敬称略

個人 會田容弘 新井達哉 小沢弘道 齋藤義弘 佐藤鎮雄 田中耕作 田辺早苗
野田豊文 森谷 幸

団体 福島県文化財センター白河館
山形県教育委員会 山形県立うきたむ考古資料館 村上市教育委員会 新発田市教育委員会
喜多方市教育委員会 福島市教育委員会 須賀川市教育委員会 郡山女子大学短期大学部考古学研究室

第3章

森と人の歴史をたずねる



ふくしまの豊かな森は、

人々の暮らしに豊かな恵みをもたらしてくれました。

いにしえの人々が森とどう関わってきたのかを見てみましょう。

あいさつ

財団法人福島県文化振興事業団理事長
兼福島県歴史資料館長

富田 孝志

このたび開催されます「ふくしま森林文化企画展」において、福島県歴史資料館では「森と人の歴史をたずねる」というテーマで展示を行います。

ご承知のように本県は森林が県土を広く占めており、森林資源の恩恵を現代に伝えてくれたふくしま人の苦労を歴史から学び、豊かな森林環境を未来に伝えることの大切さを知ることが当館の展示の趣旨と考えております。

当館は、昭和45年のオープン以来、古文書などの大切な歴史資料や福島県の行政文書などをお預かりして整理・保管し、皆様の閲覧に供したり、収蔵資料展などで鋭意公開を進めております。

今回の企画展にあたりましては、当館に収蔵しております古文書、県庁文書、絵図、屏風などの歴史資料や、福島県教育委員会の委託を受けて当事業団遺跡調査部が劣化防止業務を行っている植物遺存体や木製品などを展示いたします。

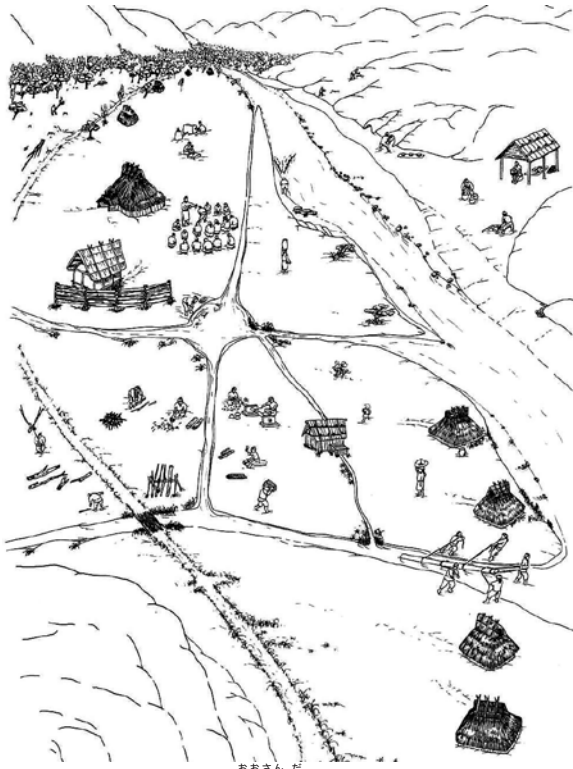
県民の皆様におかれましては、企画展を連携している他館とともに、ぜひ本館に足を運ばれ、ふくしまの森林文化の歴史的側面についてご理解を頂戴できれば幸いと存じます。

森のすがた

ふくしまの森は、自然環境の変化や人間の関与によって、その姿を変えてきた。

その移り変わりは、遺跡から検出される花粉や植物遺存体などからも知ることができる。いわき市大猿田遺跡の発掘調査データは、人々をとりまく木々、木材資源として活用された木々、食用として珍重された木々の姿を明らかにしている。また、人間が森に関わることによって、森のすがたがどのように変化していったのかを理解することができる。

大猿田遺跡の花粉分析結果によると、縄文時代にはコナラ属コナラ亜属を主体とする落葉広葉樹優勢の森が形成されているが、古代磐城郡の施策による木製品生産加工場となる8世紀（奈良時代）には、針葉樹と広葉樹のバランスが崩れ始める。9世紀（平安時代）になると、針葉樹が優勢となり、人々が遺跡から去った10世紀以降は、再び落葉広葉樹の割合が回復していることがわかる。



1 想像図（いわき市大猿田遺跡の木材加工風景）
画像提供：福島県教育委員会

遺跡からは、加工された木製品のほか、森から伐採された木材、加工の際に削り取られた木片などが出土したほか、種子なども多く発見されている。

また、遺跡から検出された自然木や木製品、花粉データには認められないモモ・スモモ・ウメの種が、8世紀代の溝跡から大量に出土している。これらは遠方から食用として運ばれたものと思われ、フルーツ王国ふくしまの古代の食生活を知るうえで興味深いものである。



2 奈良時代に切り出されたマツ材（いわき市大猿田遺跡）
写真提供：福島県教育委員会



3 奈良時代の溝から発見されたモモの種子
（いわき市大猿田遺跡） 福島県教育委員会蔵



4 奈良時代のオニグルミ
（いわき市大猿田遺跡）
福島県教育委員会蔵

森の利用

森林資源を活用するため、人々はその用途に応じた木々を選択しながら生活に活用してきた。

遺物名	針葉樹								広葉樹		
	イチイ科	マツ科		スギ科		ヒノキ科			クリ科	トチノキ科	
	イチイ	モミ	マツ	スギ	スギ?	ヒノキ	ヒノキ?	ヒノキ or スギ	アスナロ	クリ	トチノキ
木筒	0	4	0	3	1	2	0	0	0	0	0
板状加工木	1	32	9	22	0	9	1	7	0	2	0
曲物側板	0	2	0	0	0	1	0	0	1	0	0
曲物底板	0	1	0	6	0	3	0	0	0	0	1
箸状木製品	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0

表1 大猿田遺跡出土木製遺物の用材

板状加工木のうち、木筒の形状に近いものはモミ・スギ・ヒノキが大多数を占める。

引用文献

松田隆嗣1998「大猿田遺跡出土木製遺物の用材について」『常磐自動車道遺跡調査報告 11』福島県教育委員会ほか



5 桶（相馬市大森遺跡）
江戸時代 モミ
底径17.8cm 体部高18.0cm
福島県教育委員会蔵



6 把手付桶（推定復元：相馬市大森遺跡）
江戸時代 モミ
口径21.5cm 底径21.3cm 体部高19.0cm
福島県教育委員会蔵



7 下駄（相馬市鷲塚遺跡）江戸時代 スギ 長さ21.9cm 幅8.2cm 厚さ0.9cm～2.5cm
福島県教育委員会蔵





8 箱形容器（新地町師山遺跡） 左：部材の状態 右：復元した形
江戸時代 スギ 一辺28.2cm 高さ16.5cm 福島県教育委員会蔵

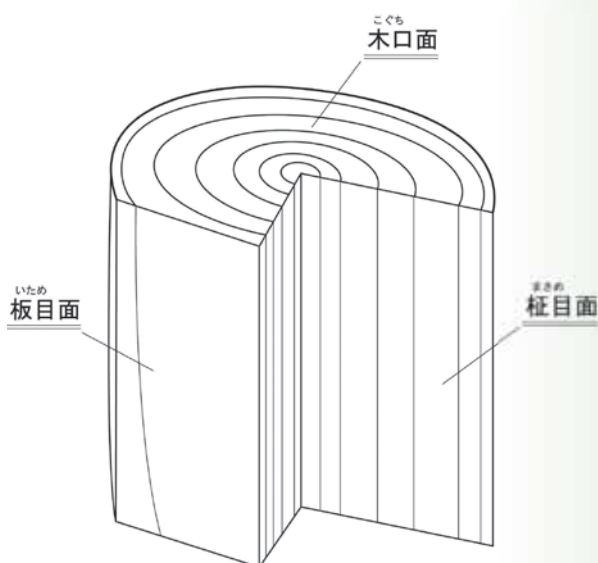


9 くりもの 剥物皿未成品（福島市茂庭 弓手原A遺跡） 左：外面 右：内面
平安時代末～鎌倉時代初期ごろか？ ケヤキ 現存径9.2cm 厚さ1.6cm
福島県教育委員会蔵

木製遺物の用材を調べることは、人々が樹種をどう選択して利用してきたかを調べるだけでなく、遺物の保存方法を決定するためにも必須の作業である。



10 樹種調査の様子



11 木材の3断面（木口面・板目面・柁目面）

樹木の内部を顕微鏡で観察すると、細胞組織の形が樹種によって大きく違っているのがわかる。こうしたマイクロな分析により、福島県から出土する木製品は、^{くりもの} 刳物やロクロ引きの容器にはケヤキ・イヌガヤ・ブナ、建物の建築部材にはミズナ

ラ・コナラ・クリ・マツ、板状の製品にはスギやヒノキなどが利用される傾向にあることが解る。ただし、樹種の選択は、地域と時代によって変化するほか、森に関わる人間の意志、社会状況、その時代の植生にも大きく左右されている。



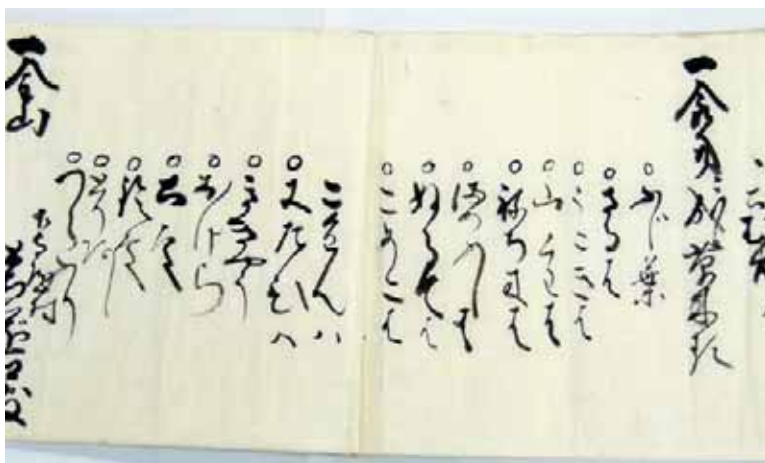
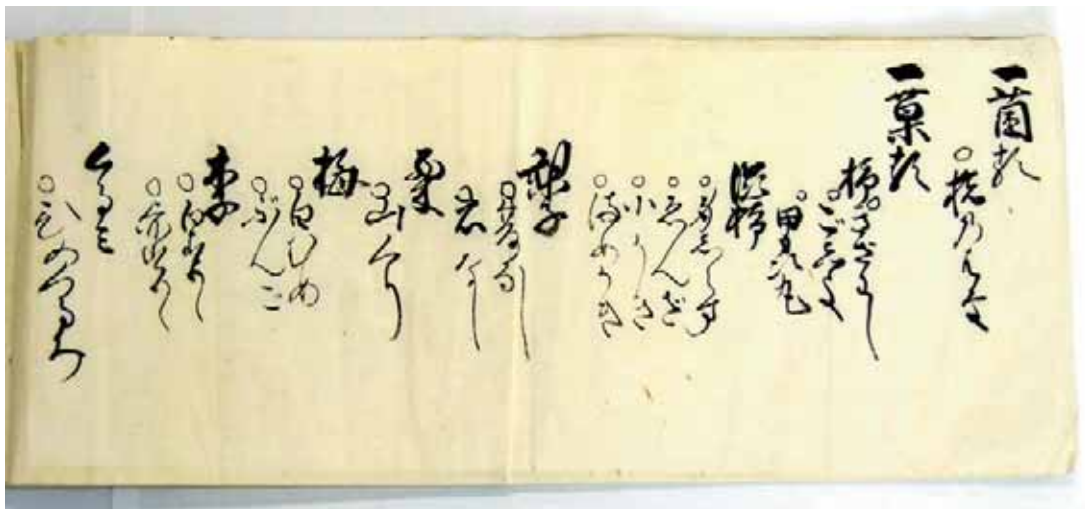
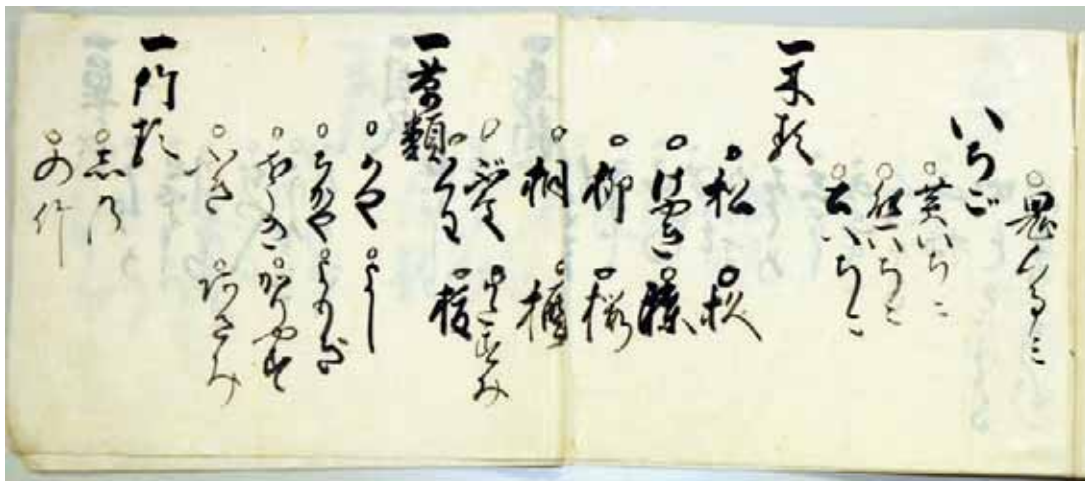
12 ケヤキ 左から順に木口・板目・柾目



13 マツ属（五葉松類） 左から順に木口・板目・柾目



14 コナラ節（コナラ・ミズナラなど） 左から順に木口・板目・柾目



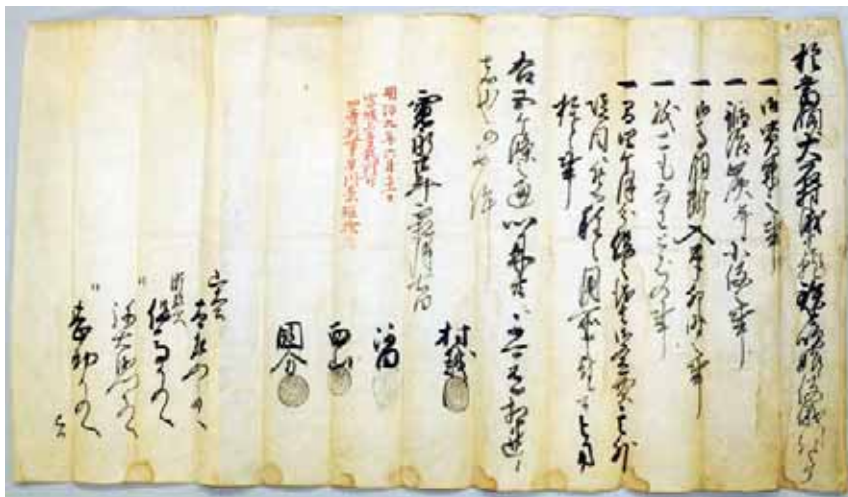
15 穀類草木魚鳥獸其外品々書上帳（部分） 庄司家文書 87号

享保20年（1735）6月に作成された二本松藩領安積郡下守屋村（郡山市三穂田町下守屋）の名主の与五右衛門が同村の産物をまとめて二本松藩に提出したものの控え。この調査は江戸幕府の本草学者丹羽正伯の依頼に基づくもので、この産物帳では穀・菜・菌・菓・木・草・竹・魚・貝・鳥・獸・虫・蛇など16種の項目に分類されている。そのうち、木類としては松・杉・檜・漆・柳・桜・桐・樺・ブナ・カタズミ・桑・榎、竹類としては篠竹・野竹が挙げられている。また、菓類としては柿・渋柿・梨・栗・梅・李・胡桃・苺、食用になる草木類として藤・サルナシ・ウコギ・山桑・ネジキ・豆藤・ヌルデ・コメコ・マタタビなどが記されている。これにより下守屋村での樹木の分布が知られ、当時の植生の記録として重要な史料である。（渡邊智裕）



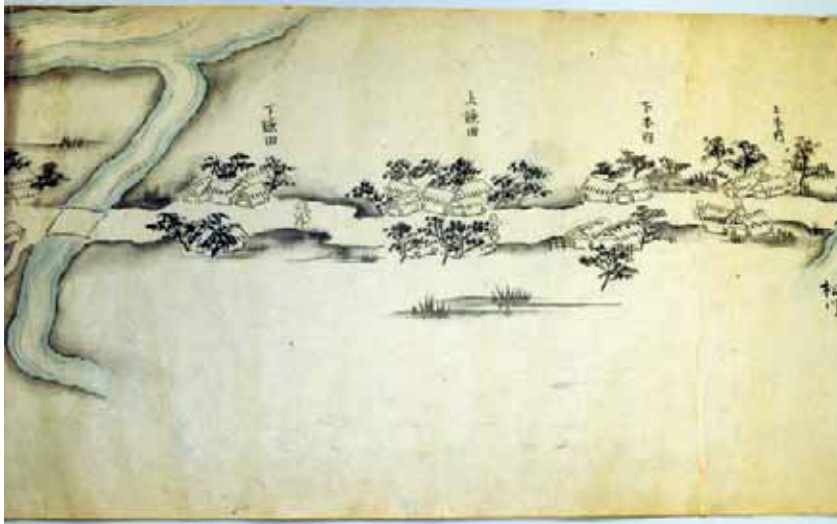
16 相定申證文之事 旧茂庭村文書262号

寛文13年（1673）2月17日、茂庭（福島市飯坂町茂庭）・湯野（同飯坂町茂庭）・飯坂（同飯坂町）の3ヶ村の惣百姓は各村の名主に対して流木に関する取り決めの証文を提出した。摺上川などで木を流した際に途中で盗み取ることを禁じ、これは洪水の時でも例外ではなく、もし窃盗に及んだ場合は1本につき100本の木を弁償するように3ヶ村で相談して取り決めた。茂庭村で伐採された木材は自然の傾斜を利用した「しら」という方法により摺上川に設けられた貯木場へ運ばれ、ある程度の量が貯まると堰き止めていた貯水場の木組みを崩し、その水の勢いで摺上川を流し下した木は西根下堰の取入口近くでいったん陸揚げされた。その後西根下堰や西根上堰を用いて川下の桑折（伊達郡桑折町）・藤田（同国見町藤田）方面へ流し、最終的に阿武隈川を下していった。（渡邊智裕）



17 国分久胤等連署製鉄掟書 日下金三郎家文書378号

米沢藩の福島奉行国分久胤・同西山宗信・福島郡代河田氏親・同村越秀信らが米沢藩領伊達郡大石村（伊達市霊山町大石）の山売太左衛門・同村肝煎但馬・同弥右衛門・同甚助に対し、大石村での製鉄を始めるにあたって5ヶ条にわたる諸役を免除した文書。買米のこと、鍛冶炭ならびの小役、馬に飼料を卯時に与えること、紙・菰・縄・苫を納めること、4ヶ月の役は御着買以外については大石村が境目の地域であるからさまざまな用事を申し付けるので免除する。以上の5ヶ条については今後も確かに免除すると伝えた。製鉄の工程では膨大な木炭を必要とし、立地は炭の原料となる木材が容易に調達できるような山間部が選ばれた。米沢藩では、鉄は留物として他領からの流入や他領への流出を口留番所で厳しく規制されていた。この背景には、領内での鉄の価格や流通の統制、鉄に対する税の賦課、製鉄技術の流出などの問題があると考えられる。（渡邊智裕）



18 奥州道中絵巻（部分）木目沢伝重郎家文書1号

18世紀後半頃の成立とみられ、奥州道中沿いの町並み・寺社・名所などが描かれている。この巻は福島城南南口の信夫橋から始まり、仙台城下の入口で終わる。摺上川は「靄上川」と表記され、瀬上（福島市瀬上）では流木を引きあげる様子が描かれている。摺上川では、山間部で春や秋に木を伐採し、河川を使って下流に流して運搬していたが、この方法を流木という。（渡邊智裕）





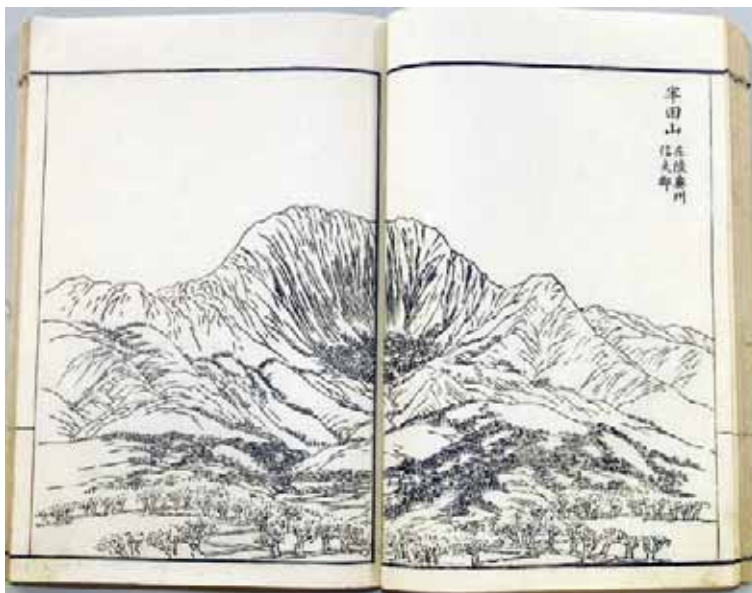
19 陸奥国信夫伊達惣検地屏風 安斎直巳家文書38号

この屏風は、幕府代官の国領半兵衛重次（1620 - 1701）が延宝7年（1679）6月に福島を離れるに際して、感謝の意味を込めて福島の見廻役であった安斎氏に贈ったものと言い伝えられおり、屏風の記載内容から遅くとも延宝年間（1673 - 1681）には作成されたものとみられる。六曲一雙の屏風で、阿武隈川左岸の信夫郡の一隻と阿武隈川右岸の伊達郡の一隻からなる。各村は色分けされ、当時の村名・石高が記されていると同時に、当時の地形・土地利用・溜池・井堰・一里塚・木戸・渡し場・中世城郭址・屋敷林・植生なども分かり、信達地域の歴史を調べる上で大変貴重な情報が盛り込まれている。屏風は向かって右が南、左が北である。右下から左下に流れる大河は阿武隈川、右上の山間部から左下で阿武隈川に合流するのは広瀬川、中央上が玉野（相馬市玉野）この屏風は現在福島県指定重要文化財になっている。（渡邊智裕）



20 二十四輩順拝図会 後篇四 山内英司氏寄贈文書141号

文化6年(1809)10月に刊行された全国の浄土真宗の有力寺院およびその近辺の名所図会。作者は浄土真宗の僧侶にして河内大谷派専教寺住職でもあった了貞で、挿絵は名所図会の絵を得意とした竹原春泉斎の手になる。伊達郡国見町石母田にある義経の腰掛松で、江戸時代には既に全国的に知られた名所であった。脚絆に菅笠姿の二人の旅人は手に杖を持ち、しばしその樹勢に見とれており、右側の天秤を担いでいる従者とみられる人物は感心して眺めている。その解説によると、義経の腰掛松は大木で大木戸(伊達郡国見町大木戸)の傍らの貝田(同町貝田)にあり、弁慶が平泉(岩手県西磐井郡平泉町)下向の折にここで休んだという伝承を載せている。(渡邊智裕)



21 名山図譜 個人蔵

画は松平定信ゆかりの谷文晁の手になり、陸奥南部の医者川村元善(号錦城)の編で文化元年(1804)に刊行された。山を中心に据え、その裾野に植物・湖沼・河川・旅人・民家などをバランス良く配し、遠近法で写実的に描き出している。半田山(伊達郡桑折町北半田)は18世紀から幕府直営の銀山としても知られ、佐渡金山奉行の管理下に置かれていた。山容は扇形で遮るようにそそり立って描かれ、中腹の窪地には銀山で働く人々の家々がひしめきあっている様子がわかる。また、麓には桑畑が広がっており、松井寿鶴斎の『東国旅行談』に記されているように信達地域が日本有数の養蚕地帯であったことを如実に物語っている。なお、その所在地を信夫郡とするが、伊達郡の誤りである。(渡邊智裕)



22 古社寺調 四神社ノ部
信夫・伊達 福島県神
社庁文書28号

明治28年(1895)6月13日、県社黒沼神社(福島市御山)から福島県知事日下義雄(1852-1923)へ提出された書類に添付された絵図。黒沼神社の建物と社地四周の絵図で、修験の山である信夫山の雄姿、鬱蒼とした鎮守の森も墨の濃淡で写実的に描かれている。鎮守の森は赤松・杉・広葉樹などからなっている。

(渡邊智裕)



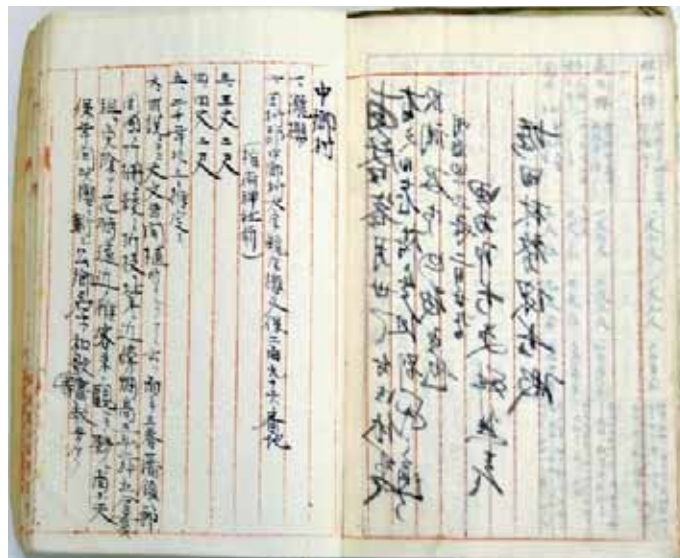
23 古社寺調 二神社ノ部
西白河・東白川・石川・
田村 福島県神社庁文
書29号

明治28年(1895)8月、馬場都々古別神社(東白川郡棚倉町)から福島県へ提出された書類に添付された絵図。馬場都々古別神社の建物と境内が彩色で詳細に丹念に描かれて、境内には杉・赤松・広葉樹が生い茂っている様子がわかる。『古社寺調』は明治28年に福島県が実施した寺社の文化財調査報告書で、福島県神社庁文書は明治初期から昭和前期にかけての福島県の公文書群である。(渡邊智裕)



24 法用寺縁起絵巻（部分） 福島県庁文書1837号

天台宗の古刹雷電山法用寺（大沼郡会津美里町大字雀林字三番山下355）に伝わった法用寺縁起絵巻の彩色写本で、元本は人物や風俗の描写から中世絵巻であると判断される。この絵巻は明治29年（1896）福島県が作成した『明治廿九年古社寺名所旧蹟碑碣宝物関係書類』二ノ二に法用寺取調書の別紙第3号の宝物として綴られており、大沼郡赤沢村（大沼郡会津美里町）役場から報告されてきたものである。これは明治28年4月5日に北海道庁や府県に対して出された内務省訓令第3号「古社寺調査事項標準」に基づく調査であった。波間に漂う流木が岸辺に打ち上げられ、この霊木は近隣の家に火事・疫病などの災いをもたらした。不吉であるということで、大和国当麻郷（奈良県葛城市）の人々はこの木に綱をかけて長谷郷（同県桜井市）へ曳いていった。得道上人は庵を結び、仏師たちは霊木から像高2丈6尺の十一面観音像を造り上げ、霊木の根本に近い部分から彫り出されたのが法用寺木造十一面観音立像（福島県指定重要文化財）になったという。法用寺縁起絵巻は内容から長谷寺縁起絵巻を基に作成された室町時代の絵巻であるとみられ、原本は現在所在不明であるためこの彩色写本の存在は大変貴重である。
（渡邊智裕）



25 大樹銘木調査書 福島県庁文書3233号

明治45年（1912）1月27日、東京帝国大学農科大学教授本多静六から福島県技師堀田英治は老樹・大木・銘木の調査について依頼された。調査項目は、県内の老樹・大木・銘木の地元での呼称、詳細な所在地、地上5尺での周囲、おおよその樹高、おおよその樹齢、古老木に関する伝説・記録の概要などである。これに対して福島県は県内各郡に対して調査報告を求め、その回答を林務課でまとめたのがこの公文書で、田村郡の部分は明治45年2月29日、田村郡長更科熊彦から堀田林務課長へ回答されたものである。福島県を代表する銘木として知られている滝桜（田村郡三春町大字滝字桜久保296番地）は、大正11年（1922）10月12日、「史蹟名勝天然紀念物保存法」により国指定天然記念物となった。当時から「滝桜」と呼ばれており、所在地は田村郡中郷村大字滝字桜久保296番地（稲荷神社前）幹廻り3丈2尺、樹高4丈2尺、樹齢は推定2,000年以上、一説には天文年間（1532 - 1555）には植え付けたものともいう。三春藩領時代には周囲に竹柵をめぐらして折枝を禁じ、近傍の畑の年貢を免除して保護した。江戸時代から滝桜は有名で、遠近を問わず多くの者が見に訪れ、天保年間（1830 - 1844）頃には滝桜を詠んだ京都の公卿・著名な人物の和歌懐紙や短冊がたくさん残されているという。（渡邊智裕）



26 福島縣写真帖 福島県歴史資料館蔵

甲塚古墳（いわき市平荒目字甲塚43）は夏井川河口にほど近い沖積地に築造された径37mの円墳で、大正12年（1923）3月7日、「史蹟名勝天然紀念物保存法」により国指定史跡となった。古墳の年代は6世紀後半頃の築造と推定されている。墳丘上のクロマツは高さ約8.2mで、「八方にらみの松」として親しまれていたが、残念なことに昭和50年（1975）枯死。この写真帖にその雄姿をいまに伝えている。この写真は福島市の写真家田村鐵三郎によって撮影されたもので、写真帖は迪宮裕仁親王（のちの昭和天皇）の行啓を記念して大正13年8月に福島県から刊行された。県内の名所・旧蹟・近代建築・産業などを中心に全部で61カットあり、大正11年10月12日に国指定天然記念物となった夏の滝桜（田村郡三春町大字滝字桜久保296）も載せられている。（渡邊智裕）

参考文献

- 阿部俊夫「丹羽正伯（1）～会津の葉草見分～」『文化福島』第24巻第10号（1995年1月1日、財団法人福島県文化センター）
- 阿部俊夫「丹羽正伯（2）～『諸国産物帳』の作成～」『文化福島』第24巻第11号（1995年2月1日、財団法人福島県文化センター）
- 阿部俊夫「丹羽正伯（3）～村の『書上帳』～」『文化福島』第24巻第12号（1995年3月1日、財団法人福島県文化センター）
- いわき市文化財保護審議会監修・いわき市教育委員会編集『いわき市の文化財』（2003年3月20日、いわき市教育委員会）
- 後藤政子「『穀類草木魚鳥獸其外品々書上帳』について」『福島県歴史資料館研究紀要』第26号（2004年3月31日、財団法人福島県文化振興事業団）
- 瀬田勝哉『木の語る中世（朝日選書664）』（2000年11月25日、朝日新聞社）
- 高橋 充「コラム『法用寺縁起』」会津若松市研究会編集『会津若松市史17文化編 仏像会津の仏像 [仏都会津のみ仏たち]』（2005年3月30日、会津若松市）
- 福島県教育委員会ほか『相馬開発関連遺跡調査報告』（1990年3月31日）
- 福島県教育委員会ほか『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告』（1995年2月28日）
- 福島県教育委員会ほか『摺上川ダム遺跡発掘調査報告』（1996年3月30日）
- 福島県教育委員会ほか『常磐自動車道遺跡調査報告11大猿田遺跡』（1998年3月31日）
- 三木理史「明治・大正期における府県写真帖の成立」『地方史研究』第58巻第3号（2008年6月1日、地方史研究協議会）
- 渡辺智裕「『名山図譜』に見る福島の山々」『文化福島』第26巻第10号（1997年1月1日、財団法人福島県文化センター）
- 渡辺智裕「ふくしまの自然環境～江戸の博物誌～」（平成15年度歴史資料研究巡回講習会 三島町交流センター 山びこ レジューメ、2003年6月15日、財団法人福島県文化センター）
- 渡辺智裕「『大樹銘木調査書』について - 明治期福島県の緑の文化財調査 - 」（『いわき地方史研究』第46号（2009年10月4日、いわき地方史研究会）
- 渡辺智裕「発見された『法用寺縁起絵巻』」『福島県史料情報』第10号（2004年12月25日、財団法人福島県文化振興事業団）
- 渡辺智裕「福島県庁文書所収の『法用寺縁起絵巻』について」『福島県歴史資料館研究紀要』第27号（2005年3月31日、財団法人福島県文化振興事業団）
- 渡辺智裕「安積郡に棲息していた狼・獺」『福島県史料情報』第14号（2006年1月25日、財団法人福島県文化振興事業団）
- 渡辺智裕「高瀬の大木（ケヤキ）と『大樹銘木調査書』」『福島県史料情報』第25号（2009年10月25日、財団法人福島県文化振興事業団）

第4章

森のくらし



森ってなんだろうか

木々が生い茂る森。

森という人々の暮らしに与えられた

条件はどのように人々の生活に関係するのだろうか。

それは、あまりにも壮大な問いであり、

環境と人間と文化と変化といった多数の変数を

一挙に見据えなければならない難問である。

そうはいつでも、ふくしまの森とその恵みにより育てられた

生活や文化は確実に存在する。

しかしその姿は見る方角によって、視線の高さによって、

異なる姿を見せる。

そのいろいろな姿のいくつかを紹介してみよう。

森のくらしへ

福島県立博物館

館長 赤坂 憲雄

第1章とともに県立博物館が担当するのがこの第4章「森のくらし」です。森ではどんなくらしが営まれていたのでしょうか。山の木を切り倒し材木として出荷するだけが仕事ではありません。ブナやトチの木は木地師たちの手により椀や盆などの食器に加工されました。シャクシやヘラといった汁や飯をよそう道具も作られていました。樹木の皮を利用して箕をつくるということも会津では普通でした。山菜や茸などの山の幸も森がもたらしてくれるものです。ゼンマイは保存できるように加工して出荷しましたし、その綿は弾力があるので手毬の芯に使いました。動物を狩ることも森や山での仕事でしたし、山を焼いて作物を植えることも行われていたのです。くらしは時代と場所によりいろんな展開をしていました。その一部をご紹介します。

ところで、くらしには楽しみもあります。奥深い会津では芝居が盛んでした。今でこそ檜枝岐村にひっそりと残されているだけになってしまいましたが、かつては奥会津各地に芝居の舞台があり芝居の一座があり、公演が行なわれていたのです。こうした楽しみが可能であったことの経済的な理由のひとつが麻の栽培がもたらした富だったとおもわれます。その時代は山深い地とはいえ、江戸や京大阪とつながっていた場所でもあったのです。

森でのくらしと楽しみ、その両方を見ていただければ、森というものへの見方もまた新たになるでしょう。

森に生きること



ヤマサキノゴヘイ
只見町教育委員会蔵



馬の版木
只見町教育委員会蔵



鉄砲巻物 只見町教育委員会蔵



ケモノトリ
奥会津博物館蔵



オリッカ



火伏せ
只見町教育委員会蔵

木々に囲まれ、生育する木々を利用して営まれる生活をこれから見ることにする。たとえば、樹木を利用するといっても、それは時代により変化する。当然のことながら現在とはかつてと同じではない。その過去もずっと変化の連続だったはずだ。「麻」という産業を失ったときにどう対応したか。全国を覆った「養蚕」だっていまは見る影もない。そう、サワグルミで箕を作るひとはいるかもしれないが、もう蚕座は作らないだろう。

上棟式に木材を削って特徴的な意匠を造り棟木

に下げるといことは木の霊を新築に際して祀ることだ、と解釈できないわけではない。しかも、この習俗が衰退だけしているかというところでもない。一方山に入り、樹木を切り倒すときに作法はどうなのだろうか。狩猟の際の儀礼はどうなっているのだろうか。

そうして、どのような楽しみにより人は生きるのだろうか。

複雑な「森に生きる」ということのほんの一面をながめてみよう。

木を加工する



マエッピキ：製材用の鋸



木地碗の底 固定したあとがみえる

カンナ棒のあとがきれいな木地碗

樹木をどのように利用するかによって、いろいろな仕事が生まれてくる。

まず、最初に木を切り倒し、木材へと加工するのが元山もとやまといわれる人たちである。もちろん、機械化されていないのだから、使用する道具おの のこぎりは斧と鋸だ。この先は木挽きこびの出番になる。マエッピキという大きな鋸を使って板材を作り出すのだ。

以前にビデオを撮影した時に「主役」になっていた元木挽きの人に話を聞いたことがある。どうしてこの職業を選んだのかというと、単純に、景気がよく、金になったからだったという。



スリガタ 奥会津博物館蔵
この曲線にガイドを押し付けていけば、そのとおりに碗や皿が削れる



カンナ棒：回転する木材に押し当てて削る



というのも、父親が体が丈夫ではなく、そのため一家の家計を助けるために働きに出たので、そのときにどの職がよいかという判断をして、その結果が木挽きだった。山中に小屋掛けをして作業をしたのだという。この人にはいろんなことを教えてもらった。格言みたいな決め台詞のような、なかなか印象に深く残るようなことをよく話す人だった。木の切り方でも、日のあたる方とそうでないところとでアテとミカタという二つの方向があり、木を切り倒すときはどのように鋸を入れるのかということも説明してくれた。



コバ屋根の一部 奥会津博物館蔵



コバの削り台 奥会津博物館蔵
下の写真のように使う

コバ削りの作業
奥会津博物館南郷館蔵

コバを削る
奥会津博物館南郷館蔵



こうした、本格的な用材を作り出す職がある一方、もっと別な仕事もある。

たとえば、町中の家などでも、屋根を瓦で葺くふというのはなかなかできなかった。だから、コバという、木の板を使っていたのだ。風の強い海岸沿いの集落では飛ばないように石を載せ石屋根にしていた。逆に会津などでは石屋根は少なかったかもしれないが、どちらにしても抑える工夫がないと風に飛ばされてしまう。

また、同じように木を削る仕事でも、もっともっと薄くすればそれは付け木になる。薄く削った木の端に硫黄を溶かしてつけた付け木は、火を

移すのに役立った。

木地師といえ山中でお椀や皿、盆などの材料になる樹木を倒して、そこからまず粗く形をヨキや手斧で削っておいて、ロクロとよばれる手を使って回転させる旋盤で削って加工していた人々である。彼らは自分たちで田を耕すわけではなく、むしろ木材を加工し、その先の工程を受け持つ塗りをする人々に渡すことにより収入を得ていた。主要な作物の耕作を行わないと聞くと、貧しい生活を想像しがちだが、実際は手に入れた現金の力により、米でも味噌でも酒でも手に入れることができる、かえって裕福な人だったという。



左 シャモジ
右 焼印「宮島」



焼印「古峯山」



焼印「天狗」



焼印「塩原温泉」



焼印「湯ノ花温泉」

同じ木材から作りだすといっても、汁をすくう杓子しゃくし。この場合は汁をすくう部分を彫るという作業がある。ヘラ、つまりシャモジとなると平坦な板を型で抜くだけでほとんど完成してしまうということになる。

旧伊南村のある家の倉庫からは大量のシャモジが出てきた。それと一緒に焼き印も保管されていた。「宮島」といえば、広島県の宮島のことだろう。シャモジは特産品だ。それから、「古峯山」というものもあった。栃木県の鹿沼市の神社で広い信仰圏を誇っている。会津若松やその他の町中には

古峯神社のお札を納める石柱が町ごとに立っている。火災を防ぐためである。天狗の顔の焼き印はおそらくこの古峯神社のものなのだろう。それから、旧館岩村の湯の花温泉のものもあった。ようするに、これらは観光地のお土産品か、神社などの縁起物としての製品であり、受注生産だったのだろう。宮島といえはるか西国。通常ならばこのような取引にはならないだろうが、実際にはこうした受注関係があったのだ。

山の中に生活を支える方法は刻々と、あるいは急激に変化するものらしい。



大竹式炭窯の断面模型



付け木削り
奥会津博物館南郷館蔵

会津の山中からは遠く離れた相馬で山林のことを聞いていた。話は昭和38年に嫁入りした奥さんの昔をふりかえる感想である。自分が嫁にくるまでは山は景気が良く、薪を求める人に売ること十分潤っていた。海岸近くに居住して、燃料となる薪を生産できる山を持たない人たちは買うしかなかった。売りものとしての山が機能していた。一山の木を売れば嫁に出す用意などは十分できたという時代だった。富を生み出してきた山は数代前の先祖が買い求めたものだった。先見の明が30年代までの豊かさをもたらしたのだった。ところ

が30年代というのは燃料が変化する時代でもある。薪の需要は衰え、何に生活を求めるかということになり、養蚕そして、椎茸栽培と続いた。いまでは山を持つことはすでにつらいことになっていた。投下する費用を回収することなど期待できない状況になってしまっていた。

木の力 一本造の仏像



木造十一面観音立像（明光寺）

会津若松市御山の明光寺は徳一が開いたと伝えられている。この仏像は頭から腕なども含めて一本の木から彫りだされている。鑿のあとが残されているが、荒々しさの表現というよりは木の質感を表現しているものと思われ、全体的に穏やかな姿になっている。像高188.2cm。12世紀。

一木造とは割刳造や寄木造とともに木彫の技法をいう。福島県内の仏像を最もよく調査し研究している若林繁氏によると、「頭部から体躯へと、像の中心となる部分を一本の木から彫り出していく技法である。両腕や脚部など、像の中心部から大きく出た部分に別の材を寄せても、頭体の像の中心部が一材で彫り出されていれば一木造の像という。平安時代前期はこの技法が中心的だったが「しかし福島では平安時代前、後期のみならず、

この地で作られた仏像には、室町、江戸時代までも一木造の技法が息づいているのである。頭体を一材から彫り出すのであるから、最低でも像の根幹部の大きさの材が必要であり、一帯の仏像を造立するのにかなりの大木が得られなければならない。」のだという。一木造は重量があり、中心の木心に向かって干割という乾燥によるひびが入るので、それを防ぐために木心を削り抜いておくこともするという。（若林 pp.57~8）

木造金剛力士立像（大蔵寺）

大蔵寺は阿武隈川近くから立ちあがる福島市の小倉寺山中腹にある寺院で、平安時代の仏像28体が伝えられている。28体の仏像すべてが一木造であり、千手観音以外は素地のままである。材質はケヤキやかつらが多く、破損しているものも多い。金剛力士立像は像高132.5cmの内割のない一木造である。両肩には孔がうたれており、ここにかつては腕が付けられていたことが分かる。



また地方物においては、仏像の表面が木肌そのままの素地仕上が主流であることの説明として以下のことを若林が述べている。福島市の大蔵寺の縁起に「当寺の仏像をつくるときに毎夜光を放っていた霊木を山中にみつけ、それをもって仏像を彫刻した」ということから「仏像を刻んだ木は、神霊の宿っている霊木であった。木そのものがその地の神であり、その木に仏像を彫ったのである。ここには在地の神と仏像との合一がみられるだろ

う。神霊の宿っている木であるからこそ、木の本质を失ってはならなかったのである。そこで木の肌を生かした、素地仕上げの像が在地の造像では基本となったものと考えられるのである。」とする。（若林 pp.55～6）

このような若林氏の記述からは、まさに一木造り素地仕上の仏像こそは樹木に宿る神霊の力を示すものでもあったことが予想される。すなわち、これらの仏像たちは木霊、木の霊であった。

ゼンマイ綿のワンピース ぜんまい綿をめぐるエピソード

ゼンマイ綿のワンピース
ゼンマイ綿を木綿綿と混ぜて
紡いだ布を仕立てたもの。



ゼンマイの混ざった布の拡大写真



ゼンマイの綿

ゼンマイと織物といえば、秋田県由利本荘でかつて白鳥の羽と紡いだ糸を使った、ゼンマイ白鳥織りというものがあったという話を思い起こしてしまう。ところがゼンマイ綿を使ったワンピースが会津若松にあるという話を聞いたときは、きっと南会津出身で、そこでは秋田と同じようにゼンマイ綿を使って布を織ることが残っていたのだと思われた。しかし話はそう単純ではなかつ

た。なによりも、いま聞くことができるところからは、せいぜい手毬に使って、その弾力を利用するというくらいだったからだ。

戦後、伊南にあった分校の教師として赴任した夫について暮らした女性は、子どもの世話も大変なので、夫の母親を呼び寄せて一緒に暮らした。この方は岩手県の衣川の出身で、ゼンマイの綿を集めて若松に送って、木綿の綿と一緒に紡いでみたのだという。もしかしたら、岩手での知識が生かされて会津のゼンマイ綿とつながってこのワンピースができたのかもしれないと思った。



ゼンマイ綿
只見町教育委員会蔵



ゼンマイの綿の心
只見町教育委員会蔵



只見の手毬 只見町教育委員会蔵

カラムシのワンピース
昭和村教育委員会蔵



しかし、かつてゼンマイ綿を使った織物があったという話を旧伊南村の村史編纂に携わっていた方がしていた。今はもう亡くなられてしまったので、確かめようもないのだが、実際のところどうだったのだろうか。

そんななか、伊南村史の資料編に貴重な記録があったということを知った。

つまり、この時期にはすでに地域でゼンマイ綿を利用するようなことは手毬などを除けばなにもなく、むしろ、それが売れるというのなら売りたいということが読み取れないだろうか。

ゼンマイ綿収集の達し 昭和十一年五月

伊南村組合農会長

星 和雄

各幹事殿

紫薇綿販売斡旋ノ件

今回特許紡績株式会社ニ於テ紫薇製造ノ際生ズル綿ヲ利用シテ特殊織物ヲ製造スベク其ノ材料蒐集ノ為生産地出張購買ノ実施計画有之旨本会ニ対シ本県副業協会長(本県経済部長)ヨリ通知有之候処右八山村ノ遭利開発上効果尠ナカラザルモノト認メラレ候条左記御了知ノ上可燃之ガ蒐集相成様御配慮相煩度此段及通知候也

追而蒐集予定数量報告ノ都合モ有之候条折返シ御回報相成土添候

記

一、購買地及期日

郡内一ヶ所又八数ヶ所ニ於テ実施予定ノ趣ニ付本会宛御送付相成度期日ハ可成早キヲ可トスルモ期限ハ追而通知ス

二、蒐集后充分乾燥セシメ棒ニテ打綿シ塵埃ヲ取除キタルモノタルコト

三、価格八品質塵芥ノ混入歩合等ニ依リ相違アルベキモ一貫匁当り購買地ニ於テ七拾銭位トス

(「伊南村史 第4巻 資料編3」p.717)

樹皮の箕とフジと竹の箕 山の恵みのカタチを考える



ケヤキ箕 奥会津博物館蔵



ジョウゴ箕 奥会津博物館蔵



皮箕の裏側

サワグルミの皮箕
奥会津博物館蔵

ふくしまの箕

箕はなによりもまず選別の用具である。この道具を使うことで穀物などの収穫物の中に混じているゴミなどを軽さの違いなどを利用して巧みにえり分けることができる。

ふくしま県内の箕は特徴的な分布をしている。広く分布する竹箕とかシノ箕と呼ばれるフジツルからとった丈夫な繊維と竹や篠竹を使って編み上げる箕。これはある意味で熟練の職人仕事になる。フジは山林に分け入り採集する。

一方、南会津などでは一般的に皮箕と呼ばれる

箕が使われてきた。サワグルミという名のとおり水辺に生えるクルミの木の皮をはいで折り返して作るもので、まれにケヤキの樹皮も使われる。サワグルミの樹皮はかつては蚕を飼育する蚕座としても利用される。

いずれも、栽培されたものではなく、山野に素材を求める採集により得た素材ということは、山からの恵みによってできあがっているという点では同じだろう。

また、片や竹とフジツルをゴザ編みにしたもの、他方は一枚の樹皮を折り曲げたものと、まっ



二本松市太田地区のシノ箕



シノ箕の折り返し部分



折り返しの部分



只見の竹箕
只見町教育委員会蔵

たく異なる材質からできているが、その構造は共通している。チリトリ型とも言われるように片方に開いた形をしているが、どちらも閉じたところは素材を折り返して縫い上げてある。

こうした明確な分布を示しているなか、南会津の只見は興味深い。皮箕の分布の中に竹箕が存在しているのだ。それは実は峠を越えた新潟との交流の影響らしい。新潟からこの技術がもたらされ、受け継ぐ人が存在したのだ。素材を与えてくれる自然環境が樹皮を利用する皮箕の存在を支え

ていると考えるならば、只見の箕はそこに情報の流入により文化の影響があるという例としてみることもできるだろう。

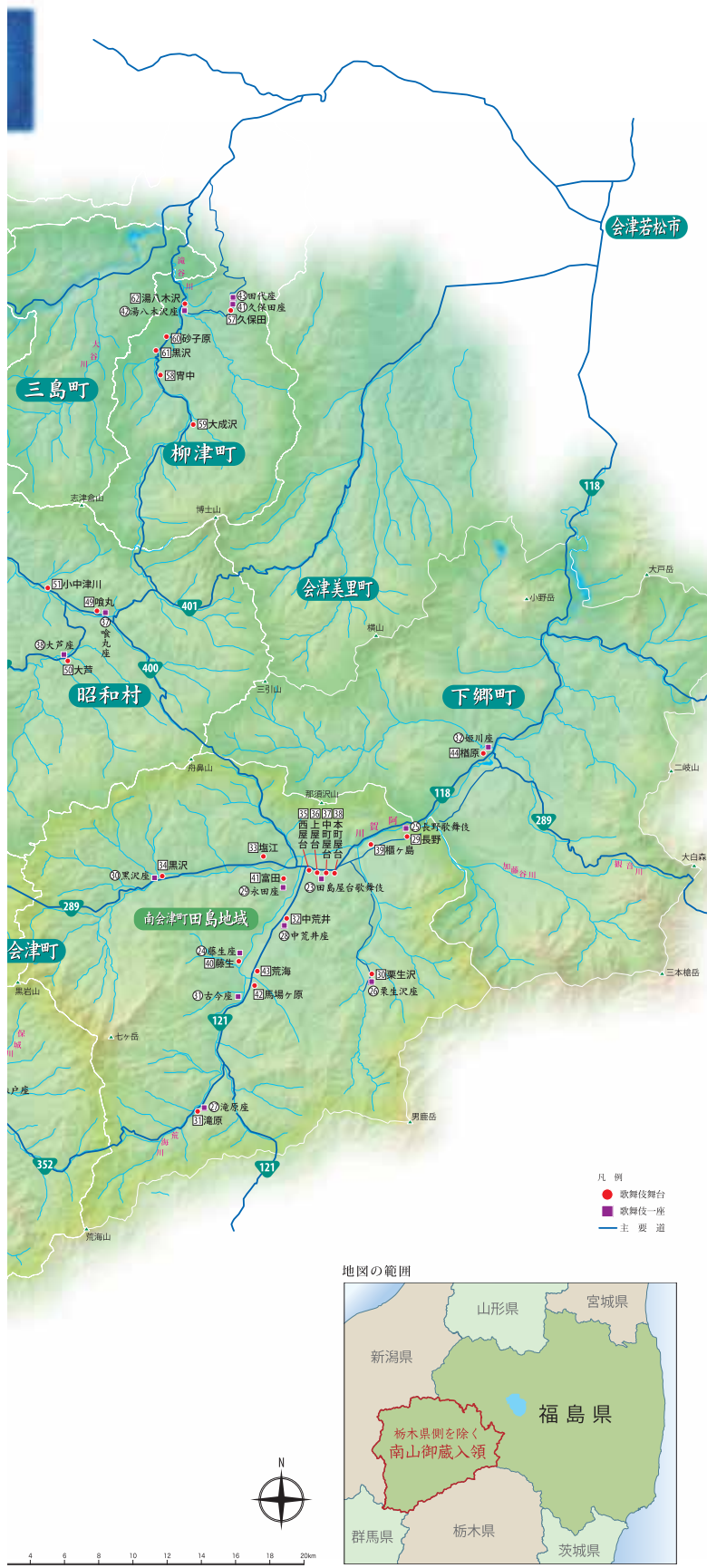
山の中の歌舞伎芝居

奥会津歌舞伎舞台および一座分布図

奥会津農村歌舞伎一座一覧

町	座名	所在地	活動期間	主な演目等	
奥会津町伊南地区	1 千葉之家花駒座	神枝味村	江戸後期から現在	「奥州安達原」「鎌倉三代記」「一の谷朝雲記」「絵本太閤記」「義経千本桜」等	
	2 大桃座	南会津町伊南地区大桃	明治期で開始	不明	
	3 古町座	南会津町伊南地区古町	不明	不明	
	4 茅ヶ風座	南会津町伊南地区茅ヶ風	昭和10年頃まで	私塾集落茅ヶ風(屋号:かわやまこ)で衣装等を近隣の一座に貸していた	
	5 宮沢座	南会津町伊南地区宮沢	不明	不明	
	6 青柳座	南会津町伊南地区青柳	江戸末期から昭和20年代まで	「伝名手本忠臣蔵」「奥州安達原」等、衣装は伊勢屋高島のかねやまこから借りた	
	7 大川座	南会津町伊南地区大川	昭和14年頃開始	「一の谷朝雲記」	
	8 山口座	南会津町伊南地区山口	明治10年代から昭和20年代まで	「三善屋」「熊谷陣屋」衣装は田島から借りた	
	9 大宮座	南会津町伊南地区大宮	大正6年から昭和2年まで	大宮屋を株式会社として設立、地芝居や興行活動を行った	
	10 鶴葉座	南会津町伊南地区鶴葉	不明	大新田(鶴井家)近隣の一座に衣装を貸していた	
	11 片貝座	南会津町伊南地区片貝	昭和22年から昭和34年まで	片貝集落(中丸家)近隣の一座に衣装を貸していた	
	12 下山座	南会津町伊南地区下山	明治時代から昭和20年代	不明 明治34年ごろが最盛期	
	13 大橋座	南会津町伊南地区大橋	大正期	不明	
	14 富田座	南会津町伊南地区富田	不明	不明	
	奥会津町南郷地区	15 福市座	南会津町伊南地区福市	昭和20年代	「一の谷朝雲記」「三善屋」「絵本太閤記」等、衣装は伊勢屋高島のかねやまこから借りた
16 福渡座		南会津町伊南地区福渡	昭和20年代	「一の谷朝雲記」	
17 強ノ原座		南会津町伊南地区強ノ原	昭和30年代	「奥州安達原」「鎌倉千本桜」等、衣装は伊勢屋高島のかねやまこから借りた	
18 森戸座		南会津町伊南地区森戸	不明	不明	
19 湯ノ花座		南会津町伊南地区湯ノ花	不明	不明	
20 木賊座		南会津町伊南地区木賊	明治初期まで	不明	
21 水引座		南会津町伊南地区水引	不明	不明	
22 雙斗座		南会津町伊南地区雙斗	不明	不明	
23 田島屋台歌舞伎		南会津町田島	江戸時代から現在	「一の谷朝雲記」「熊谷陣屋」「南山義経の陣」「絵本太閤記」	
24 藤生座		南会津町田島地区藤生	大正期	「一の谷朝雲記」「鎌倉三代記」「絵本太閤記」「伝名手本忠臣蔵」	
奥会津町田島地区	25 長野歌舞伎	南会津町田島地区長野	江戸時代から大正期	「三善屋」「伝名手本忠臣蔵」「奥州安達原」等、二段目「奥州代官」	
	26 栗生座	南会津町田島地区栗生	明治中期頃まで	不明	
	27 滝原座	南会津町田島地区滝原	明治期まで	不明	
	28 中荒井座	南会津町田島地区中荒井	不明	不明	
	29 永田座	南会津町田島地区永田	明治末期七つ	「三善屋」「一の谷朝雲記」「奥州安達原」	
	30 黒沢座	南会津町田島地区黒沢	昭和25年頃まで	不明	
	31 古今座	南会津町田島地区古今	昭和20年代	不明	
	只見町	32 姫川座	南会津町只見	不明	不明
		33 朝日座	南会津町只見町朝日	活動開始時期は不明、昭和30年代まで活動	「南山朝日石碓」「奥州安達原」「阿波徳門」「義経千本桜」等
		34 小川座	南会津町只見町小川	不明	演目は不明
35 福井座		南会津町只見町福井	不明	演目は不明	
昭和村	36 布沢座	南会津町只見町布沢	明治期から昭和13年頃	不明	
	37 喰丸座	大沼郡昭和村喰丸	不明	不明	
	38 大芦座	大沼郡昭和村大芦	不明	不明	
金山町	39 山入座	大沼郡金山町山入	昭和20年代に開始、平成2年に再開	「一の谷朝雲記」「熊谷陣屋の段」等	
	40 中川座	大沼郡金山町中川	昭和初期まで	「中川集落(長谷川)近隣の一座に衣装等をかしていた」	
柳津町	41 久保田座	河津郡柳津町久保田	大正期	「寛政伝授手帳」「鶴屋(めいぼく)千代萩」	
	42 湯八木座	河津郡柳津町湯八木	不明	「忠臣蔵」「熊谷陣屋」	
	43 田代座	河津郡柳津町田代	不明	「政談」	





奥会津歌舞伎舞台一覧

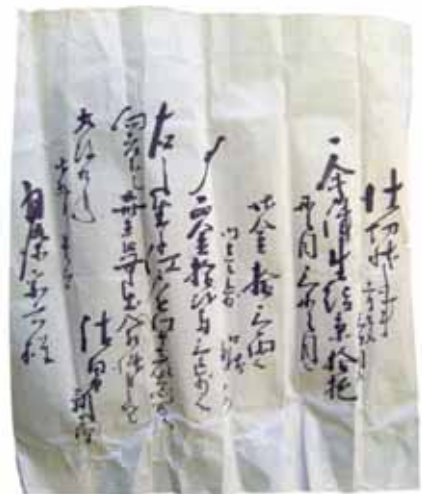
町村	舞台名	舞台形式	所在地	現状等	建設年代	
南会津町伊南地区	1 檜枝岐	常設	檜枝岐行願寺神社境内	国重要有形民俗文化財	明治33年	
	2 大桃	常設	南会津町伊南地区大桃鶴ヶ嶽神社境内	国重要有形民俗文化財	明治28年	
	3 大原	常設	南会津町伊南地区大原二丁目神社境内	昭和25年解体	嘉永3年	
	4 宮沢	常設	南会津町伊南地区宮沢香取神社境内	昭和42年7月解体	江戸末期	
	5 耻風	常設	南会津町伊南地区耻風寛政神社境内	昭和50年解体	明治22年	
	6 古町	組み立て式	南会津町伊南地区古町	現存	明治43年	
	7 青柳	組み立て式	南会津町伊南地区青柳	現存	明治12年	
	8 白沢	組み立て式	南会津町伊南地区白沢	—	不明	
	9 小塩	組み立て式	南会津町伊南地区小塩諏訪神社	—	不明	
	10 内川	常設	南会津町伊南地区内川菅原神社	昭和15~16年損壊	不明	
南会津町南郷地区	11 山口	組み立て式	南会津町南郷地区熊野神社境内	—	不明	
	12 大宮	常設	南会津町南郷地区山口	昭和3年解体	大正6年	
	13 鴉巢	組み立て式	南会津町南郷地区鴉巢	昭和47年損壊	不明	
	14 宮床	組み立て式	南会津町南郷地区宮床稲荷神社境内	—	不明	
	15 片貝	組み立て式	南会津町南郷地区片貝	昭和52年損壊	江戸末期	
	16 蛇の宮	組み立て式	南会津町南郷地区蛇の宮稲荷神社境内	—	不明	
	17 下山	組み立て式	南会津町南郷地区下山	平成6年損壊	江戸末期	
	18 泉田	組み立て式	南会津町南郷地区泉田	—	不明	
	19 大橋	組み立て式	南会津町南郷地区大橋	昭和41年に大橋の増築の上で解体して使用	不明	
	20 木伏	組み立て式	南会津町南郷地区木伏	昭和31年解体	不明	
南会津町鉾岩地区	21 湯ノ花	常設	南会津町鉾岩地区湯ノ花二荒山神社境内	南会津町指定文化財	明治22年	
	22 塩ノ原	常設	南会津町鉾岩地区塩ノ原神社境内	昭和40年損壊	文久3年	
	23 松戸原	常設	南会津町鉾岩地区松戸原	—	旧来の舞台を昭和22年移設	
	24 巽斗戸	常設	南会津町鉾岩地区巽斗戸稲荷神社境内	昭和20年解体	不明	
	25 森戸	常設	南会津町鉾岩地区森戸	昭和20年解体	不明	
	26 木賊	拝殿兼用	南会津町鉾岩地区木賊堂神社	現存	昭和15年~6年	
	27 貝原	常設	南会津町鉾岩地区貝原土神社境内	昭和22年解体	明治28年	
	28 水引	常設	南会津町鉾岩地区水引大山神社境内	昭和30年損壊	不明	
	29 長野	常設	南会津町長野春日神社境内	—	文政9年	
	30 粟生沢	拝殿兼用	南会津町田島地区粟生沢大山神社	現存	不明	
南会津町田島地区	31 滝原	拝殿兼用	南会津町田島地区滝原神社	現存	不明	
	32 中荒井	地蔵堂兼用	南会津町田島地区中荒井地蔵堂	現存	享保12年~13年	
	33 塩江	拝殿兼用	南会津町田島地区塩江神社	現存	不明	
	34 黒沢	地蔵堂兼用	南会津町田島地区黒沢地蔵堂	昭和33年6月解体	明治24年6月	
	35 西屋台	山荘	南会津町田島地区西町	現存	天保7年	
	36 上屋台	山荘	南会津町田島地区上町	現存	不明	
	37 中町屋台	山荘	南会津町田島地区中町	現存	不明	
	38 本町屋台	山荘	南会津町田島地区本町	現存	不明	
	39 櫃ヶ島	常設	南会津町田島地区櫃ヶ島神社	明治末期解体	不明	
	40 藤生	細木等で組み立て	南会津町田島地区藤生三輪神社境内	—	不明	
下郷町	41 富田	「行屋」兼用	南会津町田島地区富田稲荷神社境内	現存	不明	
	42 馬場ヶ原	常設	南会津町田島地区馬場ヶ原二荒山神社境内	昭和13年~33年頃まで	昭和13年頃	
	43 荒海	常設	南会津町田島地区荒海	—	昭和20年代	
	44 楢原	常設	南会津町下郷町楢原	—	不明	
	只見町	45 布沢	拝殿兼用	只見町布沢八幡神社	現存	不明
		46 黒谷	組み立て式	南会津町只見町黒谷神社境内	—	不明
		47 石伏	組み立て式	南会津町只見町石伏	—	不明
	昭和村	48 中向	常設	大沼郡昭和村野中町春日神社境内	昭和41年解体	明治27年
		49 陰丸	拝殿兼用	大沼郡昭和村陰丸能登神社境内	現存	不明
		50 大芦	拝殿兼用	大沼郡昭和村大芦大山神社境内	昭和20年に焼失しすくりに再建	不明
51 小中津川		常設	大沼郡昭和村小中津川辰多神社境内	現存	不明	
52 野尻		常設	大沼郡昭和村野尻	昭和44年に焼失し取り壊し	不明	
金山町	53 玉梨	常設	大沼郡金山町玉梨能登神社境内	現存	不明	
	54 鮭立	組み立て式	大沼郡金山町鮭立伊賀能登神社境内	—	不明	
	55 新遠路	組み立て式	大沼郡金山町新遠路大山神社境内	—	不明	
柳津町	56 横田	組み立て式	大沼郡金山町横田伊勢神社境内	—	不明	
	57 久保田	拝殿兼用	河沼郡柳津町久保田伊勢神社	—	不明	
	58 青中	細木等で組み立て	河沼郡柳津町青中	—	不明	
	59 大成沢	細木等で組み立て	河沼郡柳津町大成沢	—	不明	
	60 砂子原	細木等で組み立て	河沼郡柳津町砂子原	—	不明	
	61 黒沢	細木等で組み立て	河沼郡柳津町黒沢	—	不明	
柳津町	62 湯八木沢	常設	河沼郡柳津町湯八木沢	—	不明	

*「現状等」欄「—」印は、現存していないもの
 *「行屋」(ぎょうや)とは白湯山ササの温泉所 (No.41 富田)

「奥会津歌舞伎舞台および一座分布図」は奥会津博物館が作成したものです。



南会津町耻風の歌舞伎衣裳
奥会津博物館蔵



仕切り伏 伊南村史編纂室



歌舞伎のあるところ

芝居・歌舞伎とくるとどうしても檜枝岐村ということになる。舞台が残り、定期的な上演もおこなわれ、それを見るために大勢の人が集まる有名な行事である。しかし、檜枝岐の隣の旧伊南村の大桃地区にも国が有形民俗文化財として指定する舞台がある。場所は駒ヶ嶽神社の境内である。同じ旧伊南村にはほかに宮沢地区と耻風地区にそれぞれ舞台が残されている。旧伊南村の中心地であ

る古町地区には組み立て式の舞台が残されている。南会津町の奥会津博物館が調査した結果では、奥会津には62の舞台と、43の歌舞伎一座があったのである。現在も続いている檜枝岐の芝居は、この膨大な奥会津を中心とした芝居の文化のほんの一部が表出して私たちの目に触れているにすぎないのである。そして、すでに国指定になっている田島の祇園祭には屋台の上で芝居が上演されることはよく知られている。この芝居もこの大きな芝居文化圏の輪の鎖のひとつであることが理



仕切り伏の印「大坂北浜二丁目 佐新」



芝居道具の制札



南会津町耻風の歌舞伎衣裳
奥会津博物館蔵



解できる。

こうした芝居の熱が広まることができた大きな理由は、この地方が幕府の直轄地で会津藩預かりなど、支配が藩の直接ではなく、それだけ自由度が高かったことが挙げられる。芝居は生産的ではなく消費的だとして禁止されたり抑制されたりする。

もうひとつ理由をあげるとすれば、この地域の経済と交通のことも考慮に入れておいた方がよいかもしれない。かつて、奥会津と呼ばれる地域は

麻取引でにぎわった。買い付けには遠く上方の商人もやってきた。その結果、富を手に入れる人々が出現する。江戸や上方の商人にとってこの地は決して辺境ではなかったろう。今でも聞くことのできる話として、南会津町大桃（旧伊南村）の堰まで遡上してきた鱒を捕らえて、籠で背負って今市まで運んで売ったということがある。道は意外と開け、近かったのである。

楽しむことはどこにいても人々の心を捉えて放さない。

協力者一覧 順不同 敬称略

- 個人 新国 勇 渡部 賢史 星 洋一 渡部 陣一 渡部 康人 吉津 瑞穂
 平田 尚子 山次 千代 戸田 房枝 紀 治男 武藤叡太郎 星 寛
 吉田 昌康 岩崎 真幸 河原田宗興 若林 繁 政次 浩 加藤 幸治
 森本 仙介 湯川 洋司
- 団体 奥会津博物館 奥会津博物館南郷館 奥会津博物館伊南館 南会津教育委員会
 南会津町南郷総合支所教育委員会南郷分室 南会津町伊南総合支所村史編纂室
 只見町教育委員会 からむし工芸博物館 昭和村 大蔵寺 明光寺 常光寺 雄国竹細工保存会
 目黒写真館 コンテンツ株式会社 エプソン販売株式会社宇都宮営業所 東北歴史博物館
 三春町歴史民俗資料館 南相馬市博物館

引用・参考文献

- 伊南村史編さん室 2005年『伊南村史 第6巻 民俗編』
 伊南村史編さん室 2007年『伊南村史 第4巻 資料編3』
 奥会津地方歴史民俗資料館編 2001年『木地語り - 会津田島のとびの足跡 - 』
 鈴木克彦 2008年「奥会津・箕の物語 2007」『福島県立博物館紀要』第22号
 田島町民具研究会 1980年『奥会津地方の山村生産用具 』
 只見町史編さん室 1992年『図説 会津只見の民具』
 南郷村教育委員会 1979年『南郷村の文化財6』
 福島県立博物館 1987年『会津の仏像』
 福島県立博物館 1989年『中通りの仏像』
 福島県立博物館（若林繁）1997年『福島県の仏像 - 福島県仏像図説 - 』 福島県立博物館
 渡部陣一 2009年「奥会津に花ひらいた歌舞伎文化」『会津人群像』第14号 歴史春秋社

主な展示資料

国指定重要有形民俗文化財
 県指定重要文化財

	資料名	所蔵者		資料名	所蔵者
○	木造金剛力士立像	大蔵寺		皮箕	奥会津博物館
○	木造十一面観音立像	明光寺		オリッカワ	当館蔵
○	南郷の歌舞伎衣装	奥会津博物館南郷館		二本松の箕	当館蔵
	耻風の歌舞伎衣装	奥会津博物館		南相馬市の箕	当館蔵
	コバ作り資料	奥会津博物館南郷館		手毬	只見町教育委員会
○	付木削り資料	奥会津博物館南郷館		ゼンマイ綿	只見町教育委員会
	伐採運搬用具	只見町教育委員会		ゼンマイ綿のワンピース	当館蔵
	木地関係資料	奥会津博物館		カラムシワンピース	
	手挽きろくろ	当館蔵		緋麻着物	伊南村史編さん室
	狩猟関係資料	只見町教育委員会		麻仕切帳	伊南村史編さん室
	炭焼き模型	当館蔵		火伏せ	只見町教育委員会
	竹箕	只見町教育委員会			

「森と海」
森と海が育む命

森に雨が降り、動物や植物を潤します。

潤った森の栄養を、川の流れが海に運びます。

川が運んできた栄養が、海の生き物を育てます。

雲はやがて雨となって、森へと降り注ぎます。

森から海へ、海から森へ、

命を育む森と海について紹介します。

森が死ねば 海が死ぬ

アクアマリンふくしま

館長 安部 義孝

いわきの老漁師は杯を傾けながらつぶやいた。「魚をとりすぎたわけではない。だんだん魚がいなくなった。それは今となればダムや河川工事、沿岸の土木工事のせいだ。」ダムや堰堤が土砂を堰き止め、海岸に砂を補給しなくなりました。護岸工事のたびに砂が動き磯を埋めます。つまり稚魚が育つ場が無くなっているのです。

国の海岸法の改正を受けて本県沿岸の海岸を保全する基本計画がまとめられています。海岸防護一辺倒から環境・利用の概念が付け加えられたのはよいのですが、守備範囲に河口も松川浦も入っていないのには驚きました。河川や干潟、森は違う法律があるので別々に議論しているのです。森・川・海、水源から河口、沿岸まで過剰な治山治水、海岸防護の土木工事が生物多様性を損なってきたことは明らかです。異業種の徹底的議論と技術革新が今、必要であると思っています。

森

豊かな森は命を育む（写真1）

多種多様な樹木が茂り立つ豊かな森。そこでは、樹木から落ちた葉が分解され、腐葉土となり他の植物の栄養となります。その植物を食べる動物が集まり、また、その動物を食べる生き物が集まります。そしてそれぞれの生き物が残した糞がまた土壌を育てます。このような循環が森を育て、森に集まる生き物を育てています。



写真1

森は木があれば良いのか？（写真2）

まっすぐ育つことで一定の敷地に多く植えることができることから、生産効率を上げるため戦後多く植林されたスギやヒノキなどの針葉樹ですが、安い外国産の木材の流入により需要が減少、また担い手が減ったことや高齢化が相まって森林が管理されなくなってきました。単一樹種、特に針葉樹の植林は、自然林に比べ森林生態系としての機能が限られてきます。また、手入れがされず放置された人工林は、枝葉が重なり合うことで、日が差し込む隙間がなくなり、木が痩せ、さらには他の草木が育たず、林床植生が貧弱になります。そして地表がむき出しになった森では、保水する機能がなくなってしまうのです。この適切な整備がなされない放置人工林が問題になっています。



写真2

川

森と海をつなぐ川（写真3）

自然環境における川の重要な役割の一つは、地上を流れ下りながら、土の中に蓄えられた栄養分を海に運ぶことです。雨が降り、地表を流れたり地中に浸透したりした雨水は、やがて川を下り海へと注ぎます。近年は、山間部の森林から落葉した腐葉土には、海の植物プランクトンの生育に必要な栄養分が含まれていることが分かり、山間部と海を結ぶ川の重要性が注目されています。

変わりゆく川の姿（写真4）

一口に川といっても、上流・中流・下流では、その環境は全く違うものです。水温、流速、水深、岩、



写真3



写真4

植生の違いや蛇行や滝など様々な環境の中で、生き物達は自分に適した場所を選び、棲むことができていました。しかし、増水による川の氾濫、水害から生活を守り、また同時に川を生活に利用するため、「治水・利水」という考え方が出てきました。その結果、川本来の姿は急速に失われてしまいました。

絶滅に瀕する生き物たち（写真5）

かつての川には、ドジョウ、ゲンゴロウ、コイ、ウナギ、オオサンショウウオ、メダカ...など大小様々な生き物たちが多様に暮らしていました。しかし河川工事や水質悪化による影響で、絶滅に瀕している川の生き物たちがたくさんいます。福島県では「レッドデータブックふくしま」の中で、レッドリストとして24種類の哺乳類、72種の鳥類、15種類の両性・爬虫類、20種の淡水魚類、112種の昆虫類、781種の植物を公表しています。また、水生昆虫には、幼虫期を川で過ごし、成虫になると水面や陸上（空中）で生きていくものがたくさんいます。これらの昆虫は、川魚の餌になるばかりでなく、成虫になると森林や里山の小動物の餌になることが多く、陸上の生き物たちとも密接に関わっています。川の生き物の多様性が崩壊することは、里山に生きる生き物たちの崩壊にもつながるのです。



写真5

海

砂浜がなくなる（写真6）

押し寄せられる波によって絶えず削られる砂浜。それを補っているのは、川から運ばれてくる砂です。そのバランスが保たれることによって、豊かな砂浜が維持されてきました。しかし、川の途中にダムや堰ができることで、砂が下流へ流れず滞留してしまいます。わたしたちにとってとても身近な自然環境の一つである砂浜が、だんだんと姿を消しつつあるのです。

一方、ダムでは滞留された砂をそのままにしておくと、ダムとしての機能を果たさなくなってしまう。そのため定期的に排砂という作業を行い、溜まった土砂を流します。昔は毎日少しずつ流されていた土砂が一気に流れるため、その終着地点である海には一気に大量の土砂がたまってしまいます。土砂はやがてヘドロとなり、海底は貧酸素状態に陥ります。そのような場所では、海底に生活する貝類や海藻類が姿を消していきます。



写真6

いのちを育む海（写真7）

海にすむ生き物の数は200万~2,000万種ともいわれていますが、現在種名が分かっているのは約30万種にすぎません。そんな膨大な種類数を誇る海の生き物たち、そのなんと3分の1の種が、浅海域を誕生の場としています。沿岸域には藻場や干潟、マングローブといった、生まれたばかりの小さな命を守るさまざまな環境があるのです。

しかしその「命のゆりかご」は、現在急速に減少しています。河川から流れてくる栄養分が減っていることも、浅海域での稚魚の餌不足を引き起こしているといわれています。小さな命が育まれにくくなった海では、私たちの食料となる水産資源も減少していきます。海の資源を持続的に利用するためには、生き物たちの誕生、育成の場である沿岸環境の改善、そして持続可能な資源の利用方法を検討する必要があります。海は大きく、果てがなくみえますが、その資源は決して無尽蔵で

はありません。現にわたしたちの身近な魚であるマグロやイワシの漁獲量の低下は著しいものがあります。



写真7

海上がり（写真8、9）

海はそこで捨てられた物、それ以外の物、様々な物が漂い流れ着く森、川全ての終着点です。



写真8



写真9

「生物多様性」とは？（写真10）

私たちがくらす地球上には、未知のものを含めると3,000万種ともいわれる生き物が暮らしています。

生き物たちはさまざまな環境に適応して進化し、多種多様な姿や生態を獲得してきました。その「種の多様性（さまざまな生き物がいること）」、そして種がつくりだす「生態系の多様性（さまざまな環境があること）」、また個々の種がもつ「遺伝子の多様性（それぞれの種のなかでも個体差があること）」、これらをあわせて「生物多様性」とよんでいます。



写真10

アクアマリンの活動 (写真11)

現在、伐採などによる森林の減少や河川海洋の水質汚染または、乱獲などにより、人知れず、姿を消している生物も少なくありません。このように絶滅のおそれのある生物を「絶滅危惧種」と呼んでいます。

アクアマリンふくしまでは様々な絶滅危惧種を育て環境保全、保護に関する啓蒙活動を行っています。また、「BIOBIO カップの里」、「蛇の目ビーチ」や「移動水族館」をとおしてそれぞれの環境が果たす役割やそこに住む生物の生態などについて学ぶ場を設けています。



写真11

自然の再生力 (写真12)

「アクアマリンうおのぞき」の入口に植えられている木はもともと、小名浜港の東魚市場の屋根の上に生えていました。わずかな土の中から、たくさんのヤマザクラやシャリンバイたちが元気に育っていました。

自然は一方的に破壊されているだけではありません。生き物たちは常に自分たちの生息分布を広げようとしています。自然のもつそういった力を利用すれば、再び豊かな自然環境を取り戻すことができるかもしれません。



写真12

協力者一覧 順不同 敬称略

個人 仲田 茂司 遠藤 守俊 木村 芳秀 酒井 弘巳 水野 勝男 青山 三郎 遠藤 政弘
村岡 照夫 佐藤 洋司 稲葉 修 三田村敏正 大槻 晃太

団体 いわき市漁業協同組合 久之浜漁協 久之浜・大久地域づくり協議会 久之浜地域振興
古内の桜里づくり実行委員会 有限会社 仲田種苗園 南相馬市博物館 福島虫の会

第6章

森林を体験する



名峰安達太良山の中腹、標高600mにある
「ふくしま県民の森 フォレストパークあだたら」。
ここでは、過去～現在～未来へと続く
「ふくしまの森林と私たち人間」の関わりを、
実際に森林の中で体験することができます。

ふくしま森林文化企画展に 参加させていただきます

ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団

理事長 檜村 利道

このたび企画されました「ふくしま森林文化企画展」に、私どもが管理しているふくしま県民の森も参加させていただくことになりました。ふくしま県民の森は、福島県民が森とふれあうなかで自然の大切さを学ぶ場として設定されたものです。私どもはこの目標に沿って、今までいろいろなイベントを企画し、実施してきました。ふつうにいう展示は森林館に常設のものがありますが、この機会に新たに特別に展示できる資料の準備はありません。そこで、企画展としてはやや異例になりますが、生きている森を基礎に、今までに行ってきたなかから精選して、皆さんが参加する実践型のイベントを、心を込めてお世話することにしました。

森林文化は古くから郷土の自然とともに生きる文化として培われてきたものです。しかし、現今の世界的経済のなかでは、地域の自立性とともに消えようとしています。それで世界的経済だけの世の中になり、地域の自立が保障されなくなったらどうなるか、考えると心穏やかではられません。地域には地域の自然があり、その自然と調和した生活がありました。これを伝承して今に生かすことを、私たちはもっと真剣に考えなくてはなりません。たしかに古くて現代にはなかなか合わなくなっている古来の森林文化を、生きている森のなかでまずは実践してみて、考えてみる機会をつくり、県民の皆さんに提供しよう、それが私どもの企画です。そこでの主役は参加される皆さんになります。お子様を含めて県民の皆さんの積極的なご参加をお待ち申し上げます。

森林を知る

森林と共生するには、まず森を知ること 魅力あふれる森林の生きものを観察

森林を知る

森林には、様々な生き物が生息しています。ここでは、森林を形づくる「樹木」とそこに暮らす「昆虫」の観察を行います。

初夏のツリー・ウォッチング

- 主催：ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団
講師：富田昇さん（東北大学大学院）
参加対象：植物、特に樹木に関心のある方で、山道を散策可能な方
開催日時：平成22年6月29日（火）10:00～14:00
開催場所：遠藤ヶ滝遊歩道（杉田川源流）
定員：20名
参加費：無料
趣旨：新緑の森を歩きながら、森林の成り立ち、森林の中での生きもの同士の関係などについて観察します。杉田川源流に沿った散策路（遠藤ヶ滝遊歩道）を歩きます。



夜の森 昆虫ウォッチング

- 主催：ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団
協力：福島虫の会
講師：福島虫の会会員
参加対象：昆虫観察に興味のあるお子さんとその父兄
開催日時：平成22年7月24日（土）17:00～20:00
と7月25日（日）9:00～12:00
開催場所：ふくしま県民の森 フォレストパーク
あだたら 森林館周辺の林地
定員：親子10組
参加費：無料
趣旨：日頃は体験できない「夜の森林」に生活する昆虫を観察します。ライトトラップを使用し、光に集まる昆虫を観察します。夜のうちに地表に仕掛けたトラップは、翌朝、回収します。地面を歩き回る虫たちに出会えることでしょう。



森林で楽しもう

森林の中でこんなこともできます 森林と人、人と人、地域と人との交流

あだたらの森ミュージカル合宿

- 主催：ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団
講師：モンデンモモさん（ミュージカル・クリエイター、
歌手、音楽学校の講師）
協力：モンデンモモを育てる会
モンデンビューロー福島
モンデンモモさんの教え子の皆さんほか
参加対象：森の中で、様々な人と交流しながら音
楽活動をしたい県内外の親子
開催日時：平成22年8月6日（金）13:00
～8月8日（日）15:00
開催場所：フォレストパークあだたら一帯の施設
定員：地元親子10組、東京親子10組
参加費：
地元参加 宿泊無し：@6,000円/大人 @5,500円/小人
（音楽レッスン代、食事代、資料代含む）
宿泊有り：@12,000円/大人 @10,000円/小人
（音楽レッスン代、宿泊料、食事代、資料代含む）
東京から参加 @15,000円/大人 @12,000円/小人
（東京往復交通費、音楽レッスン代、宿泊料、食事代、資料代含む）

趣 旨：森林という場の持つ素晴らしさ、可能性を活
用し、首都圏と福島県、県内都市部と農村
部との子供の交流を図る。安達太良の森林
と人との交流を図る。音楽の達人、森林の
達人、農業の達人と若い人の交流を図る。
コテージに宿泊しながら歌唱、演技などの
レッスンを専門家から受け、森林の中での
ミュージカルを上演する。たった3日間で！
モンデンモモさん（指導者）のマジック
にかかると、初めての子どもミュージシャン
になれる。これも森林の持つ素晴らしいパ
ワーか！？



森林の恵み

森林から生まれ、育んだ恵み



農林水産物や加工品の紹介と直売

- 主催：ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団
協力：大玉村
参加対象：どなたでも
開催日時：平成22年8月11日（水）～8月15日（日）
開催場所：ふくしま県民の森 フォレストパーク
あだたら ビジターセンター前
定員：なし
趣 旨：福島県の森林が生み出した様々な恵みを
紹介し、販売。米や野菜・果物、キノコ、
ハチミツなどの農産物、加工品。ウッ
ディークラフトなど林産物や加工品。

森林で暮らす

薪や炭などのバイオマスを活用すること 森林に優しいエコロジーなキャンプ

森林に優しい暮らしとは？

地球温暖化や生物多様性の維持など、私たち人類は、様々な環境問題に直面しています。人にとってだけでなく、地球の環境に優しい暮らしが、今、求められています。

ふくしま県民の森 フォレストパークあだたらでは、実際に森林の中で暮らすことで、森林に優しい暮らしを始めてみようと考えています。

エコ・キャンプ教室

主催： ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団

協力：福島県キャンプ協会

開催日時：平成22年6月12日(土) 11:00

～ 6月13日(日) 11:30

開催場所：ふくしま県民の森

ユースキャンプ場およびその周辺

定員：親子10組

対象：キャンプ初心者

趣旨：自然環境に優しく、森林の自然を楽しむためのエコキャンプのノウハウを提供。テントやキャンプ用品は無償レンタル。

内容：森林に優しくするためには、

- 1) 森林の仕組みをよく知ること
- 2) 森林の中で排出物を減らすこと
- 3) 森林の中でエネルギーの消費を抑えること

などを実行します。

エコ・キャンプ教室では、

地面のすぐ上にテントを張ることで、森林の息吹を肌で感じることができるようになります。地面の温度、森林の空気の匂い、風の音、生物の息遣いなど...

暮らしの中で、余りものが出ないように工夫した調理をします。水の使用も最小限に抑えるよう、さまざまな工夫をこらします。

食事を作るにも、闇夜を明るくするにも、極力化石燃料や電気を使わずに暮らします。

森林の有効活用にもつながらる森林資源の「木材」を使い、調理や照明のエネルギーとします。

福島県キャンプ協会のインストラクターが、テントの設営、撤去やエコクッキング、森林との楽しい触れ合い方などを指導します。



森林の活用

私たちの暮らしを豊かにする森林 木やツルなど森林資源の活用

キノコをつくろう(キノコ植菌体験)

主催： ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団

協力： 福島県きのこ振興センター

講師： 福島県きのこ振興センター

参加対象：キノコ栽培やキノコ観察に関心のある人、親子

開催日時：

1回目：平成22年7月7日(水) 10:00～13:00

一般対象

2回目：平成22年7月11日(日) 10:00～13:00

親子対象

開催場所：ふくしま県民の森 フォレストパーク
あだたら 森林館周辺の林地

定員：各30名

参加費：無料

趣旨：キノコの植菌(ムラサキシメジ)を体験しながら、森林^{もり}の中でのキノコの役割について学ぶ。また、森林^{もり}の恵みであるキノコを試食しながら、おいしい食べ方も学ぶ。

炭焼きのすべて

主催： ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団

協力： 大玉村

参加対象：炭焼きに関心があり、実際に炭焼きを試してみたい人、炭を活用したい人

開催日時：平成22年7月2日(金) 10:00～16:00

と7月3日(土) 9:00～12:00

開催場所：ふくしま県民の森 フォレストパーク
あだたら 森林館周辺の林地

定員：20名

参加費：無料

趣旨：昔懐かしい炭焼きも、未来の環境保全

に役立つ技術や成果がぎっしり詰まっている。「火入れ」から「炭出し」までの一連の作業を体験しながら、炭焼きの技術の習得を目指すとともに、これからの炭の活用方法についても提案する。

ツルを使っての道具作り(カゴ編み)

主催： ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団

協力： 大玉村

参加対象：ツル細工などに関心のある方

開催日時：平成22年8月25日(水) 10:00～15:00

開催場所：ふくしま県民の森 フォレストパークあだたら

定員：20名

参加費：無料

趣旨：かつて、私たち東北地方の先祖は、森林の中から材料を調達し、普段の生活用具を作ってきた。ツル細工で現在の暮らしに潤いをプラスする。

親子で遊べる遊具作り

主催： ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団

協力： 大玉村

参加対象：親子で一緒に昔ながらの遊具を作りたい方

開催日時：平成22年8月28日(土) 10:00～12:00

開催場所：ふくしま県民の森 フォレストパークあだたら

定員：親子10組

参加費：無料

趣旨：オモチャはおもちゃ屋さんで...、ではなく、世界に一つだけのオモチャを、山の木を使って作る。おじいちゃんには懐かしく、お父さんやお子さんにはびっくりのオモチャで、世代を超えて遊ぶ。

森林をまもる

生活に密着した地域の森林を手入れし、守るためには？

森林を守る

森林と人とは、長い歴史の中で密接に関わりながら地方ごとに特色のある文化を形成してきた。近年は、生活様式の変化に伴い、森林と人との関係が希薄となってきた。特に人々の生活に密着した地域の森林＝里山は、人の手が入ることで一定の姿が維持されてきたが、今やその価値が忘れ去られ、荒廃の一途をたどっている。

一方で、身近な自然に関心を持ち、地域の大切な資源として里山を活用しようとする人たちが各地で活躍し始めている。

多様な森林の価値の中で、環境教育や地域再生などの目的を果たすための森林をどのように考え、どのように維持し守っていくのか。

ここでは、森林や林業、人と森林との関係について、新たな角度からの取り組みを紹介する。



地域のための森林整備講座

主催：ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団

協力：福島県県北農林事務所

講師：福島県県北農林事務所ほか

参加対象：里山の保全や地域再生に関心のある人で

森林整備のノウハウを習得したいと考えている人、環境教育活動に関心のある人

開催日時：平成22年7月14日(水) 9:00～15:00

開催場所：ふくしま県民の森 フォレストパークあだたら

定員：20名

参加費：無料

趣旨：新たに森づくりの取り組みを始める人を対象として、目指すべき森林の姿の考え方や森林整備の知識・技術等について紹介し、地域での森林ボランティア活動を進めるための考え方と技術の習得方法を紹介する。室内での講義と実際に道具を使いながらのフィールドワーク(実践)を行う。

内容：地域の森林の現状と森林づくりの考え方について

森林整備の作業種類と作業方法

森林整備のための道具の種類と使い方

林業労働安全衛生

森林ボランティア活動について

森林の現況調査

森林整備の実技

新しい森林づくりについて



協力者一覧 順不同 敬称略

個人 富田 昇 モンデンモモ

団体 福島虫の会 大玉村 福島県キャンプ協会 福島県きのこと振興センター 福島県県北農林事務所

ふくしま森林文化企画展図録

発行日 平成22年6月26日

発行 福島森林文化企画展実行委員会
〒960 8670 福島市杉妻町2番16号(西庁舎6階)
TEL 024 521 7425 FAX 024 521 7543

印刷 陽光社印刷株式会社



【写真】
第5回ふくしま森林業写真コンクール入選
「200才で懐かせる」平野健一氏